

平成 28 年度文部科学省「総合的な教師力向上のための調査研究事業」
(民間教育事業者の力を活用した教員の資質能力向上事業)

即興型英語ディベートを用いた
教員の研修プログラムの開発・実施
平成 28 年度 成果報告書

2017 年 1 月

一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会
(PDA)



はじめに

本調査研究は、「平成 28 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業」として、文部科学省より委託されたものです。学校現場において、教員の皆さんは、グローバル化を踏まえた英語教育の強化、外国人児童生徒への対応など、複雑かつ多様な問題に対応することが求められています。

新たな教育課題に対応するために、時代にあった指導法の修得が喫緊の課題となっている現状を踏まえ、その教育課題のひとつであるアクティブ・ラーニングのための指導法を一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）は提案いたします。本調査研究事業における実施テーマは、「民間教育事業者の力を活用した教員の資質能力向上事業」です。本調査研究「即興型英語ディベートを用いた教員の研修プログラムの開発・実施」は、教育委員会と民間教育事業者が連携して、アクティブ・ラーニングの一形態である「即興型英語ディベート」を取り入れた教員研修等を行うことによって、教員の資質能力を、一層向上させることを目指す取り組みです。本事業を通じて、教員の皆様が、自ら学び続ける意志をもち、教員としての資質能力を、教職生涯にわたって向上させていくことができるようサポートすることを目指します。本取り組みを通じて、教員育成のコミュニティをいかにつくっていくか、を模索すると共に、総合的な教師力向上に貢献するには、どのような対応が必要かを調査・分析し、提言を行います。

本調査研究、報告書作成にあたっては、貴重なご意見、ご助言を下さりました教育委員会ならびに教育庁、指導主事、高校教員、教育関係者、有識者の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

一般社団法人 パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）
代表理事 中川 智皓
文部科学省事業担当 新谷典子（本調査研究報告書執筆責任者）

平成28年度文部科学省 総合的な教師力向上のための調査研究事業 民間教育事業者の力を活用した教員の資質能力向上事業 『即興型英語ディベートを用いた教員の研修プログラムの開発・実施』

調査研究の概要

【課題認識】

急激なグローバル化や技術進歩のめぐるましい昨今の社会発展に応じて、学校現場では新しい課題に対する指導力が求められる。本調査研究では、昨今求められる筆記試験では評価が困難な多様で総合的なスキル(英語で話す力、論理的思考力、幅広い知識、プレゼンテーション力、積極性など)を鍛える手法として即興型の英語ディベートを取り扱う。アクティブラーニングの一形態としての即興型英語ディベートの授業での実施が少しずつ広がってきているが、このような新しい学習方法に対して十分な指導ができる教員がかなり少ないこと、また、新たな課題に対する指導法を自己研鑽していくモチベーションをあげていくことも急務となっている。

【調査研究の目的】

教員に求められる新しい指導力の一つとして、教員自身が即興で英語ディベートができる力を身に付ける研修、および教員が生徒にその指導が可能となる研修プログラムを開発、実践する。教育委員会と民間教育事業者が連携して、このプログラムを実践することで、より効率的かつ効果的な成果につながることを目指す。

【実施体制】

一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会 (PDA)

- ・代表理事: 中川 智皓
- ・ディベート推進(文部科学省事業担当): 新谷 典子
- ・事務局・事務局長: 東芝 佳奈子
- ・アドバイザー: 日産自動車副会長 志賀 俊之
- ・アドバイザー: 全国高等学校校長協会会長 宮本 久也

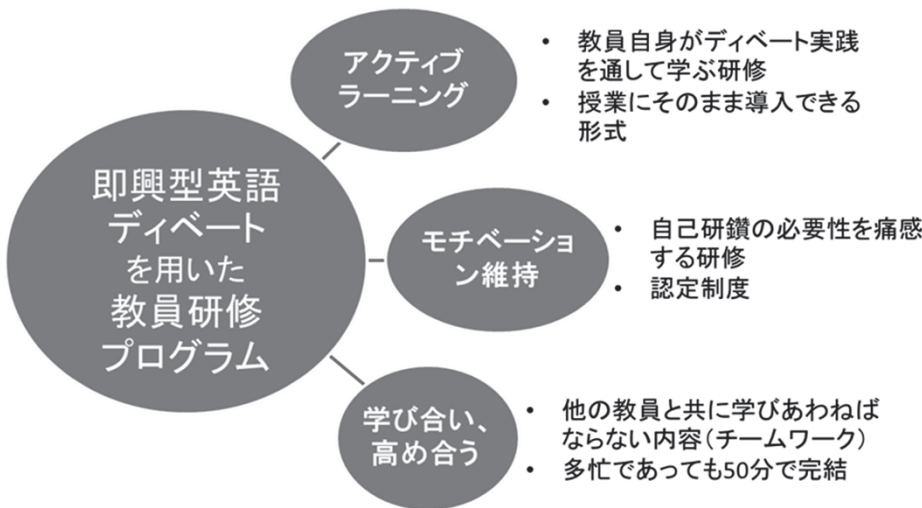
- ・千葉県教員研修 千葉県教育庁 指導主事
- ・沖縄県教員研修 沖縄県教育庁 指導主事
- ・大阪府教員研修 大阪府教育庁 指導主事
- ※実施順

【調査研究の方法】

千葉県、沖縄県、大阪府の教育委員会と連携し、教員への即興型英語ディベート研修を行う。指導主事および参加者へのヒアリング、アンケート調査を実施し、研修プログラムに対する改善点、感想を多方面から収集し、分析する。また当該結果分析について有識者助言を鑑み、プログラム改善につなげる。

取組のポイント・成果

- 本研修は、アクティブラーニング型の研修であり、教員自身がディベート実践やジャッジ実践を行う。
- 教員が自ら学び続けるモチベーションの向上、維持へ寄与する研修プログラム。(アンケート結果参照)



即興型英語ディベート研修の特長

Prime Minister (PM) (指定側 1 題目)

挨拶 Hello everyone.

話題 Today's topic is _____

立論 We define that _____

指定ポイントの数の説明 We have two points.

指定ポイント1の名称 The 1st point is _____

指定ポイント2の名称 The 2nd point is _____

指定ポイント1の説明 I will explain the 1st point _____

We believe that _____

挨拶 Therefore _____

終わりの挨拶 Thank you.

ディベート研修補助教材例
(スピーチシート)

今後の課題・成果の活用

(1) 教育委員会、教育現場と民間教育事業者の連携強化による、教員の資質能力向上への貢献

「教育現場」の支援を図る。教員が属する高校の特性を踏まえた研修プログラムの改訂につなげる。そのため、教育委員会、教育現場と民間の連携を強化する。アクティブラーニングの一形態である即興型英語ディベートの普及を継続化。教員研修の質の向上につなげる。

(2) 即興型英語ディベートに関する教育ジャッジ(審査員)認定制度の活用

生徒の即興型英語ディベートの実践について、適切に評価できるジャッジの育成が急務である。教育ジャッジとは、単にディベートの勝敗を論理的に決定できるだけでなく、教育的配慮を伴い、生徒の学習意欲を高められるようフィードバックできる人材のことである。教員の継続的な学びを後押しする制度にもつながる。

平成28年度文部科学省「総合的な教師力向上のための調査研究事業」
実施テーマ「民間教育事業者の力を活用した教員の資質能力向上事業」
調査研究主題「即興型英語ディベートを用いた教員の研修プログラムの開発・実施」

はじめに

1. 調査の概要

- 1・1 課題認識
- 1・2 課題研究の目的
- 1・3 調査研究の内容
- 1・4 調査研究体制

2. 調査研究の方法と結果

- 2・1 千葉県教員研修会 概要
 - 2・1・1 千葉県教員研修会アンケート
 - 2・1・2 千葉県教員研修会アンケート結果、まとめ
- 2・2 沖縄県教員研修会 概要
 - 2・2・1 沖縄県教員研修会アンケート
 - 2・2・2 沖縄県教員アンケート結果、まとめ
- 2・3 大阪府教員研修会 概要
 - 2・3・1 大阪府教員アンケート
 - 2・3・2 大阪府教員アンケート結果、まとめ
- 2・4 ヒアリング（指導主事）

3. 結果分析（考察）

- 3・1 筑波大学附属駒場中・高等学校（高校での導入の様子）
- 3・2 有識者コメント（京都大学教授 溝上慎一先生）
- 3・3 有識者コメント（日産自動車副会長 志賀 俊之氏）

4. 提言

おわりに

付録

- 研修における補助教材（参考：授業のできる即興型英語ディベート、中川智皓著、2015）
- 即興型英語ディベートにおける評価項目および評価基準
- 記事掲載：教育PRO、第46巻、第20号、P.20、2016年9月6日
- 平成28年度文部科学省公募調査研究申請書（PDA）抜粋

1. 調査の概要

1・1 課題認識

急速なグローバル化の進展の中で、異文化理解や異文化コミュニケーションの重要性が高まっている。異文化を理解し、世界共通語である英語を習得することは日本の将来にとっても非常に重要になってきている。そして、この急激なグローバル化や技術進歩のめまぐるしい昨今の発展に応じて、学校現場では英語教育において、英語の4技能「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」全てをバランスよく伸ばしていくことが求められている。国際化時代の英語力に必要な、「聞いた英語をそのまま理解する力」「スムーズな発信力」「論理的に相手に伝える力」を育成することが重要な課題になっている。

一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）では、英語での発信力、論理的思考力、幅広い知識、プレゼンテーション力、コミュニケーション力など複数のスキルをはぐくむことに大きな効果を得られる即興型英語ディベート（パラメンタリーディベート）に着目し、即興型英語ディベートを通じて、グローバル社会で貢献できる人材の育成に寄与することを目的に活動している。公益財団日本財団のサポートも受け、全国の高校生を対象に、授業の50分でできる形式の即興型英語ディベート（※）を紹介している。地域の交流大会、夏合宿、全国大会、さらに海外の高校生を招聘した世界交流大会も開催し、全国の教育現場および社会における即興型英語ディベートの普及に努めている。

そこで、教員の資質向上、また筆記試験では評価が困難な英語の多様で総合的なスキル（英語で話す力、論理的思考力、幅広い知識、プレゼンテーション力、積極性など）は最も重要な課題の一つであると考え。学校現場において、総合的なスキルを鍛えるためのアクティブ・ラーニングの一形態として、即興型英語ディベートを使った新しい学習方法を十分に指導できる教員が極めて限られていることが現状の問題点でもあると認識している。

本調査研究では、教員に求められる新しい指導力の一つとして、教員自身の即興で英語ディベートができる力を身に付ける研修、および教員が生徒にその指導が可能となる研修プログラムを実施することを目的とし、教員同士が学び合い、高めあうモチベーションが向上し、継続する仕組みを提案する。

（※）50分の授業で完結する即興型英語ディベートの授業導入（参考研究）

2013年度～2015年度、文部科学省助成事業：高等学校における「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」、テーマ：即興型英語ディベートを活用した統合型ルーブリック評価の研究、研究代表者：大阪府立大学工学研究科 助教 中川智皓

1・2 課題研究の目的

本調査研究では、近年学校現場で求められるアクティブ・ラーニングの一形態である即興型英語ディベートの指導が可能となる研修プログラムを開発・実施することを目的とする。

即興型英語ディベートは、一つの論題に対し、肯定と否定に分かれ、聴衆（ジャッジ）を説得させるパブリックスピーチ型のディベートである。論題は、社会、政治、環境、技術、国際問題など多岐にわたる。論題が発表されてから15分程度の短い準備時間の後、ディベートを開始する。ディベートをする者は、肯定か否定チームのいずれに属するかを自ら選ぶことはできず、自身の意見とは異なる観点からの主張も考えなければならないことがある。古くから日本で行われているディベートは、数週間から数カ月、一年間同じ論題で証拠資料を収集し、試合でそれを読み上げて証明する「準備型」が主流であった。しかし、世界では、教育現場にて即興型のディベートが広く導入されており、ブレア元首相など政治家をはじめ、多くの人々が即興型のディベートで培った力を活かし、グローバルに活躍されている。日本においても、この即興型英語ディベートをいち早く教育現場へ導入し、世界で活躍できる人財の育成に貢献することも本調査研究の目的の一つである。

1・3 課題研究の内容

本調査研究は、下記2つのプログラムをもとに行われた。

- 教員自身が即興で英語ディベートができる力を身に付ける研修プログラム
- 教員が生徒に即興型英語ディベートを指導できる力をつける研修プログラム

上記2つのプログラムの特長は次のとおりである。

(1) アクティブ・ラーニング型研修

本研修プログラムは教員自身がディベート実施を通して、論理的な議論構築、効果的なプレゼンテーション、短時間での簡潔な発言などの方法を学ぶ研修である。また、教育現場にて指導ができるよう授業進行の方法、補助教材の使用法などを内容としている。ここで重要なことは、この種のアクティブ・ラーニングの授業は、教員がやり方を紙面で学ぶよりも、教員自身が実践することで、その学習手法の特徴、意義を身に持って体験でき、指導力が向上する点である。

(2) 自ら学び続けるモチベーションの維持

本研修では、ルールに従って、参加者全員が自らの意見またチームでの議論をまとめ、必ず発言せねばならない環境が与えられる。自分の考え方、知識また表現について反省すべき点がジャッジ（講師）によって毎回明らかにされるため、自己研鑽の必要性を痛感する。逆に、ジャッジにより、他の参加者がその教員から見習うべきと称えられる点も説明されるため、自信につながる要素をも含む研修内容である。

また、ディベート実践において教員が文科省の学習指導要領を踏まえた評価基準をもとに、ジャッジの仕方を学ぶことができるため、学校の授業でも活用可能となる。さらに、即興型英語ディベート指導に関する認定制度を設け、精度の高い授業を保証できる仕組みを目指すことで、教員のモチベーションを向上、維持させる効果も期待できる。以上より、普段評価する側の教員が評価されることで、達成感を伴う研修は、自ら学び続けるモチベーションに効果的に寄与するといえる。

(3) 学び合い、高めあうこと

本研修プログラムは、他の教員とチームを組んでまた時には対戦して、共に学び合わねばならない内容である。また、通常授業の50分でも準備から実践、ジャッジまでを完結できるプログラム設計となっているため、多忙な教員でも比較的短時間で学び合える仕組みといえる。

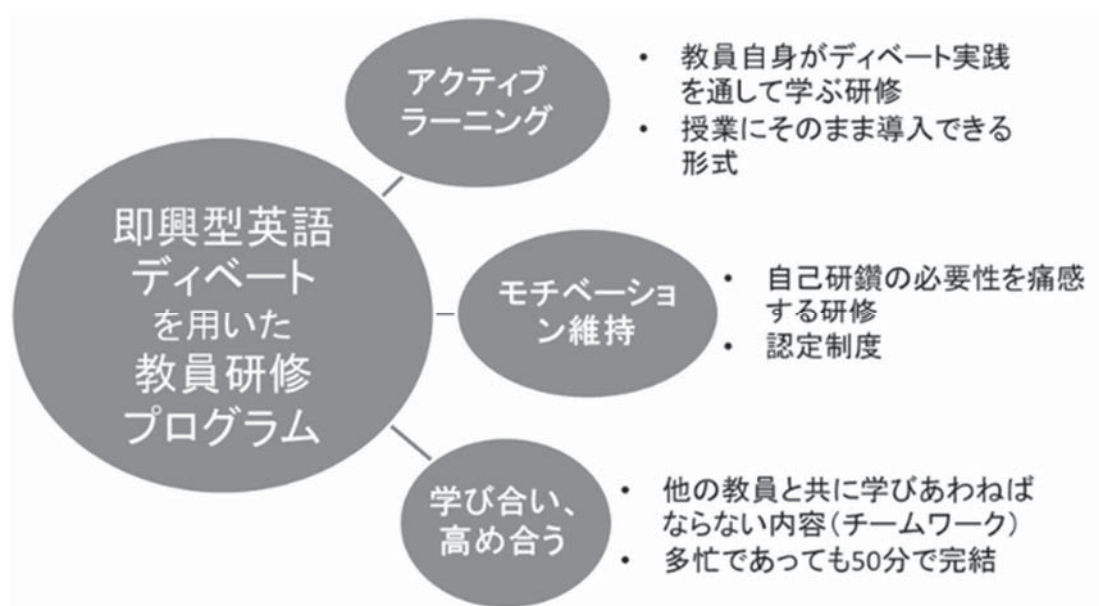


図1.1 即興型英語ディベートを用いた教員研修プログラムの特長

本調査研究では、具体的に以下の内容・取組を行った。

(1) 研修プログラムの提案

一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）では、社会人向け研修会及び教員研修会を行った経験があり、その教員研修会を通じて教員からの意見を反映させた研修プログラムを提案した。

(2) 研修プログラムの実施

複数の教育委員会と連携し、教員研修会を企画した。特に、これまで 200 校以上に即興型英語ディベートを紹介した経緯から、地域によって新しい取り組みに対する意識や考え方、教員のモチベーション、レベルが大きく異なることを認識している。よって、本調査研究では、複数の教育委員会に協力を得ることで、特定の地域のひとりよがりにならず、バランスよく効果的に調査を実施した。

教育庁からの呼びかけで英語科を中心に研修への参加希望教員を募るとともに、各地の指導主事と密に協力し、事前ヒアリングを行い、教育現場の実情を認識し、研修内容を検討した。

● 千葉県教員研修会

開催日：2016年7月29日（金）14時

開催場所：千葉県教育会館新館 501 会議室

参加者：教員 162 名（162 校）※各校 1 名参加必須の全員研修

● 沖縄県教員研修会

開催日：2016年9月20日（金）14時

開催場所：県立総合教育センターIT棟

参加者：高校教員 28 名（13 校）※希望者による研修

● 大阪府教員研修会

開催日：2016年10月7日（金）14時30分

開催場所：大阪府教育センター

参加者：教員 42 名（28 校）※希望者による研修

研修における補助教材については、付録に抜粋するため、参照されたい。

1・4 調査研究体制

実施体制		
所属部署・職名	氏名	役割分担
代表理事	中川 智皓	全体指揮
ディベート推進委員	新谷 典子ほか数名	研修会のマネージ
事務局・事務局長	東芝 佳奈子	事務担当
アドバイザー	宮本 久也 (全国高等学校校長協会会長)	教育界からの助言
アドバイザー	志賀 俊之 (日産自動車副会長)	産業界からの助言

2. 調査研究の方法と結果

2・1 千葉県教員研修会概要

開催日時：2016年7月29日（金）14:00-16:15

会場：千葉県教育会館新館 501 会議室

参加者：教員 162 名（162 校）

平成 28 年 7 月 29 日（金）、千葉県教育会館 501 会議室において、「千葉県高等学校教育課程研究協議会（外国語部会）の午後の部として「授業でできる！即興型英語ディベート」を主題とした教員研修会を行った。162 名の教員が参加し、そのうち、県立高校から 124 名、市立高校から 7 名、定時制高校から 17 名、私立高校から 15 名の参加者に加え、英語部会や指導主事の先生方にも参加していただいた。

研修は、まず初めにディベートの概要とルールについて説明したのち、即興型英語ディベートを実際に学校の授業において導入するやり方と同じやり方で行った。学校の授業は 50 分授業であるため、教員は予め肯定チーム、否定チーム、ジャッジグループにランダムに分けられ、お題（今回の研修では、「宿題を廃止するべきだ」）が与えられた後、15 分間の準備時間ののち、ディベートを行った。ここでの研修においては、ジャッジグループも作り、ジャッジ実践も行ってもらった。

当日の研修タイムスケジュール

14:00 研修開始、即興型英語ディベートのルール、授業導入事例の説明

14:40 モデルディベート

14:50 チームでの役割分担確認、論題発表

14:55 ディベート準備

15:10 ディベート実践

15:30 ジャッジ（ジャッジ担当の教員は、ジャッジ実践）

15:45 まとめ、質疑応答

16:00 終了

当日の様子を次にまとめる。

千葉県教員研修会 即興型英語ディベート研修

一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）

大阪府立大学工学研究科 助教 中川智皓

開催日時：2016年7月29日（金）14:00-16:15

会場：千葉県教育会館新館501会議室

参加者：教員162名（162校）（ほか、英語部会、指導主事の先生方にもご観覧いただきました。）

平成28年7月29日（金）、千葉県教育会館501会議室において、「授業でできる！即興型英語ディベート」を主題とした研修が行われました。研修のまず初めに、大阪府立大学工学研究科、助教の中川より、挨拶とディベートの概要、ルールについての講義が行われました。現場における授業で導入できるように、即興型英語ディベートは50分で行われます。中教審が高校の英語で「論理・表現」を新設するなど科目を再編する方針をまとめたとおり、それに伴う学校教育に於けるディベートの有用性を確認しました。



ルール説明から即興 型英語ディベートの 授業導入事例まで



全員での実践に向け、真剣に

次に、教員の皆さんにも生徒の気持ちになって、実際にディベートを体験していただきました。ディベートでは、1つのお題が与えられ、それに対して肯定チーム、否定チーム、ジャッジのグループに分かれます。どのグループになるかはランダムで決められます。論題が発表されてからディベート実践が始まるまでの準備時間は15分です。今回の論題は「宿題を廃止するべきだ。」でした。

15分の準備時間後、ディベートが開始されました。生徒の立場に立って宿題の是非を考える方もいらっしゃれば、教師の立場に立って宿題の功罪について考える参加者もいらっしゃいました。それぞれのテーブルで自チームの主張を繰り広げ、ジャッジとして参加している先生方もスピーチに耳を傾けます。それぞれのスピーチを終え、ジャッジが勝敗とその理由を述べました。スタッフジャッジによる個々人のフィードバックでは、ディベートの内容に加え、スピーチの仕方や生徒への指導の際の配慮などのコメントも伝えられました。



真剣な面持ちでの相談



スピーチの様子



質疑応答にも即興で対応



議論の後には必ず握手

本研修の終わりに、千葉県高等学校教育研究会英語部会副部長 勝井 洋一先生よりご講評を賜りました。「今、千葉県による指導力向上事業と銘打って取り組んでいるCAN-DOリストの活用と今回の中川先生の即興型英語ディベートの講習内容は、まさに対応しており併せて推進してゆきたい内容であります。」ほか多くのご感想をいただき、今後の即興型英語ディベート推進へのご賛同をいただきました。



ご講評

参加者の声（アンケートよりそのまま抜粋）

- 英語力の向上、アドリブ力の向上、客観的で冷静な視点の養成など、授業展開時に活用できると感じました。（泉高校）
- ディベートはとても英語力を向上させる上で大切な方法だと感じました。（鶴舞桜が丘高校）
- こういう場面を設定されない限り、自分でディベートをする機会は絶対にないと思うので、新しい方法を勉強させていただきました。（東葛飾高校）
- 生徒にやらせるには、まず自分がやってみないと分からない。どういう点が難しいのか身をもってやってみるべき。（成田北高校）
- 新しい学力観をもって教育活動を進めるにあたり、そこに必要な複合的学力を育てるのに非常に適していると思った。（敬愛学園）
- 授業で何らかの形で取り入れたいと思いました。（成田国際高校）
- ディベートを実際に経験して、とても難しいと思いましたが、必ず英語を使わなければいけないこと、チームメンバーと協力して、論理的に理由を組み立てることは生徒に足りないかだと思うので、もっと生徒用にアレンジできれば良いと思った。（木更津東高校）
- 英語で自分の意見を即座に整理するのはトレーニングが必要なもので、今後の取り組みへの良いきっかけとなると思う。（松戸南高校）
- 今回のように、強制的にでも教員側にディベートをさせるというのは、非常に効果的だったと思います。（市原緑高校）

参加高校

(県立) 千葉、千葉女子、千葉東、千葉商業、京葉工業、千葉工業、千葉南、検見川、千葉北、若松、千城台、磯辺、泉、幕張総合、柏井、千葉大宮、土気、千葉西、犢橋、八千代、八千代東、八千代西、津田沼、実籾、船橋、薬園台、船橋東、船橋啓明、船橋芝山、船橋二和、船橋古和釜、船橋法典、船橋豊富、船橋北、市川工業、国府台、国分、行徳、市川東、市川昴、市川南、浦安、浦安南、鎌ヶ谷、鎌ヶ谷西、松戸、小金、松戸国際、松戸六実、松戸向陽、松戸馬橋、東葛飾、柏、柏南、柏陵、柏の葉、柏中央、沼南、沼南高柳、流山、流山おおたかの森、流山南、流山北、野田中央、清水、関宿、我孫子、我孫子東、白井、印旛明誠、成田西陵、成田国際、成田北、下総、富里、佐倉、佐倉東、佐倉西、佐倉南、八街、四街道、四街道北、佐原、佐原白楊、小見川、多古、銚子、銚子商業、旭農業、東総工業、匝瑳、松尾、成東、東金、東金商業、大網、九十九里、長生、茂原、茂原樟楊、一宮商業、大多喜、大原、長狭、安房拓心、安房、館山総合、天羽、君津商業、木更津、木更津東、君津、上総、君津青葉、袖ヶ浦、市原、鶴舞桜が丘、京葉、市原緑、姉崎、市原八幡、(市立) 市立千葉、市立稲毛、市立習志野、市立船橋、市立松戸、市立柏、市立銚子、(定時制) 千葉商業、千葉工業、生浜、船橋、市川工業、行徳、松戸南、東葛飾、佐倉東、佐原、銚子商業、匝瑳、東金、長生、長狭、館山総合、木更津東、(特支) 千葉豊、四街道、(私立) 昭和学院、千葉敬愛、千葉経済大学附属、安房西、千葉商科大学附属、千葉学芸、東邦大学附属、敬愛学園、八千代松陰、東京学館、植草学園大学附属、千葉聖心、愛国学園附属四街道、秀明八千代、東京学館船橋、(英語部会) 成田国際高等学校長、流山おおたかの森高校長、清水高校長、船橋古和釜高高校長、土気高校長、成田国際、薬園台、成田国際、松戸国際、市立柏、松戸国際、浦安南、千城台、翔凜、県総合教育センター学力調査部、県教育庁教育振興部指導課

2・1・1 千葉県教員研修会アンケート

研修後、参加者へアンケートを配布し、研修の効果や研修に対しての意見を確認した。アンケート内容を次に示す。

8. 前頁7で④、⑤と答えた方へ
その理由をお書きください。

()

9. これまでの教員研修会(本研修会を除く)で、特に効果的だった、またはあまり効果がなかったと感じられる内容をお書きください。

効果的だった内容: ()

あまり効果がなかった内容: ()

10. 今回の教員研修会は、これまでの研修会と比べていかがでしょうか。

(①従来よりも大変よい ②従来よりよい ③従来通り ④従来より悪い ⑤従来より大変悪い)

その理由をお書きください。

()

11. 本日の感想をご自由にお書きください。

()

12. よろしければ以下に連絡先メールアドレスをご記載ください。

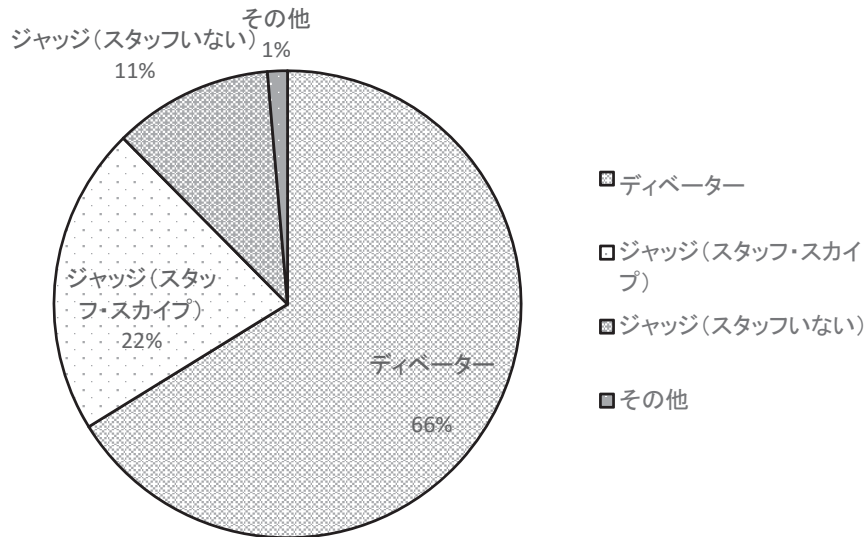
()

以上、ご協力ありがとうございました

2・1・2 千葉県教員研修会アンケート結果、まとめ
アンケート結果を、以下に示す。

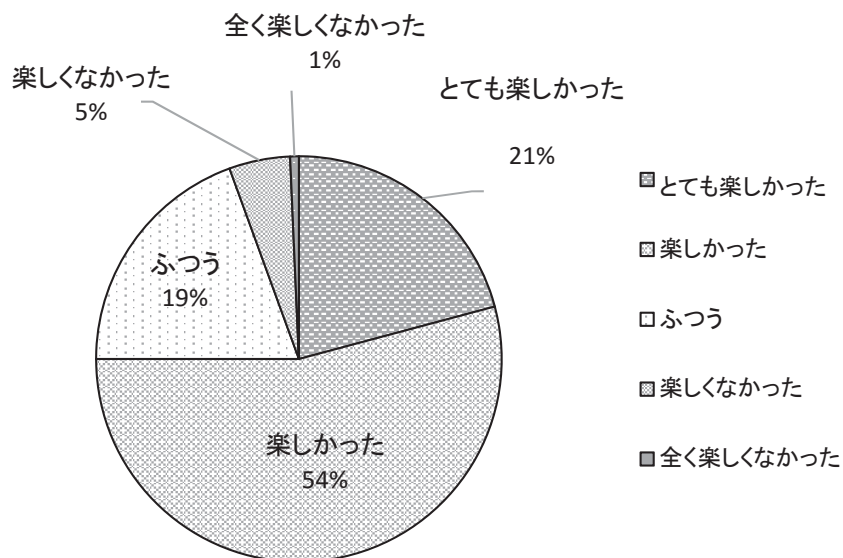
【千葉県教員研修会アンケート結果】

Q1.役割



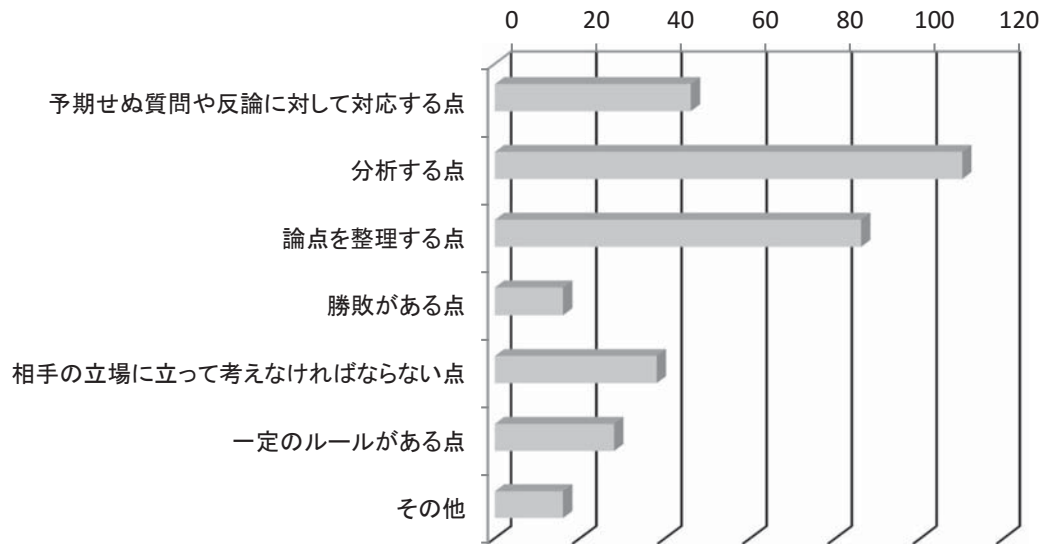
無回答 8名

Q2楽しかったか

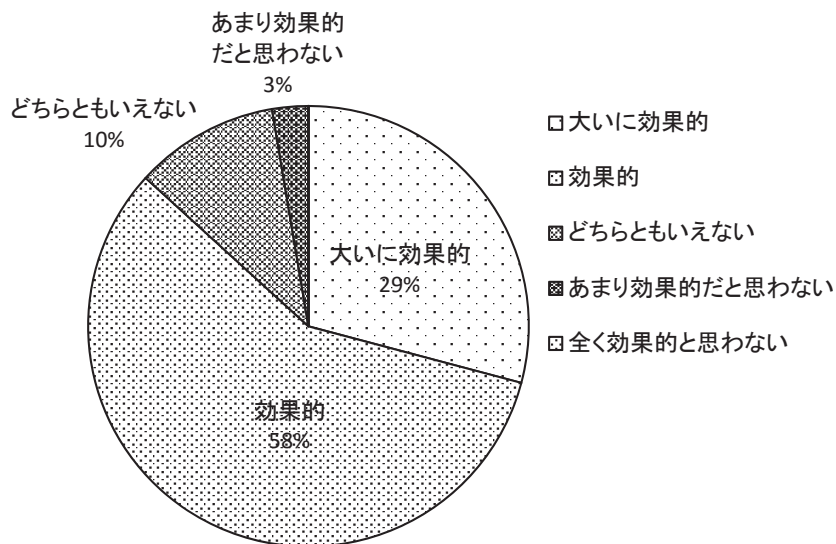


無回答 9名

Q3 どのような点がアクティブラーニングとしての効果が高いと思うか



Q4 教員の資質・能力向上への効果



無回答 2名

Q5 Q4(教員の資質・能力向上への効果)の理由(原文のまま記載)

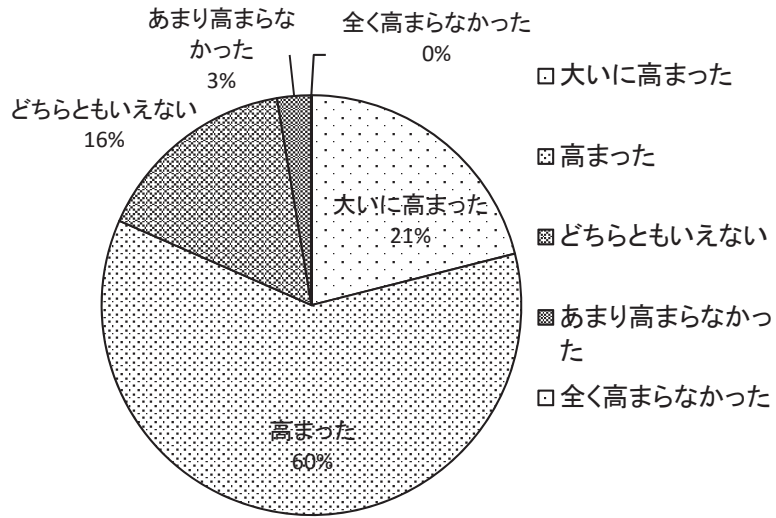
【効果的である】

- 英語ですばやくthinkingして writing して speaking する能力、相手の言っている内容を Listening して understanding する能力、四肢能全てきたえられる。
- 単に発言すればいいのではなく、相手のことも考えながら発言内容を考えなくてはいけないのでプレッシャーも感じるが、その分効果はあると思う。
- 教員に、多少なりともプレッシャーをかけられるからです。普段なかなか、英語を使う機会がないので(授業を除き)、教員同士でディベートをすることは、刺激的になると考えます。主張とその理由をわかりやすく伝える普段していないことなので弱点の向上になると思うので。
- 教材としては勿論、教員が考えていることを、英語を用いて発表等する機会は、とても有意義だと思いました。ディベートは今後必要となるスキルですが、私達教員の中には経験のない者が多いので、このような研修は必要だと思います。
- 新しい学力観をもって教育活動を進めるにあたり、そこに必要な複合的学力を育てるのに非常に適していると思われるため。
- 英語を話し英語で考える事によって、自分の課題や自己研鑽するきっかけにつながったから。
- 生徒の気持ちになって取り組める。
- しっかりとフィードバックできるジャッジが必要。
- 即興型は、今の暗記型教育をやめていくのに特効薬になりそうです。
- 一つの授業の技としてとても勉強になりました。一方生徒のレベルによってできないまたは実施するにあたってサポートがとても大変だと感じました。
- 生徒に行わせるときの気持ちが分かる。
- 生徒の気持ちが分かる。或いは、教員としては、どういう論理の展開が予想されるかシミュレーションしておくことで、色々と考えたりする機会が増える。
- ディベートをやる機会がこれまでなかったもので、色々生徒や指導を受ける側の立場考える契となった。
- 専門家によるモデルディベートがすばらしかったです。上手な Speaking ができることが即興でできることにとても感動しました。

【効果的ではない】

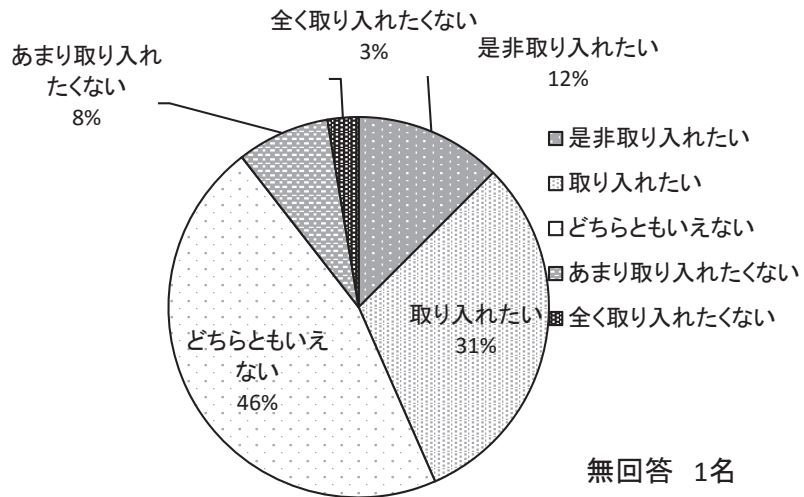
- 生徒にジャッジをさせること、指導の難しさが解消されていない。
- 時間が足りないのでは？
- 勤務校のレベルによると思うから
- 英語のそのものの定着が不十分なので方法論として現実味がない。
- 英語スキルの高い教員には向いていると感じた。

Q6 モチベーションは高まったか



無回答 1名

Q7 授業に取り入れたいか



無回答 1名

Q 8 Q 7で「あまり取り入れたくない」と「まったく取り入れたくない」と答えた理由

- 評価に困る。
- まず日本語で考えるから始めないについていけないと思う・問題（トピック）への深い理解と興味が必要。
- 授業の目的は大学受験英語に対応すること。
- 「英語」でのディベートはレベルが高過ぎる 日本語でも厳しいと思う。
- 少し難しい、自分の意見を発言することに慣れていない。
- 現在の学校の生徒向きではないから。日本語で取り入れてみたい。
- 職業高校で、英語の授業が2単位程度であり、時間の余裕が無い。もちろん、それだけの力があるかも不安である。
- 教科書を進めるのが精一杯で、時間的余裕がない。教科書との関連性、教科書の1レッスンとして入れてあれば、やらざるを得なくなると思う。
- 英語に抵抗が強い生徒にはハードル、プレッシャーが強すぎて英語への嫌悪感増すと思うから。もう少しスモールステップのやり方について教えていただきたいかったです。
- たとえ簡略化しても実践するのは現実的に難しいというのが正直な感想です。
- 生徒の学力状況から判断するときびしいと思う。
- 自分自身・生徒が英語力が足りなく、成り立たない

Q 9 これまでの教員研修会(本研修会を除く)で、特に効果的だった、またはあまり効果がなかったと感じられる内容

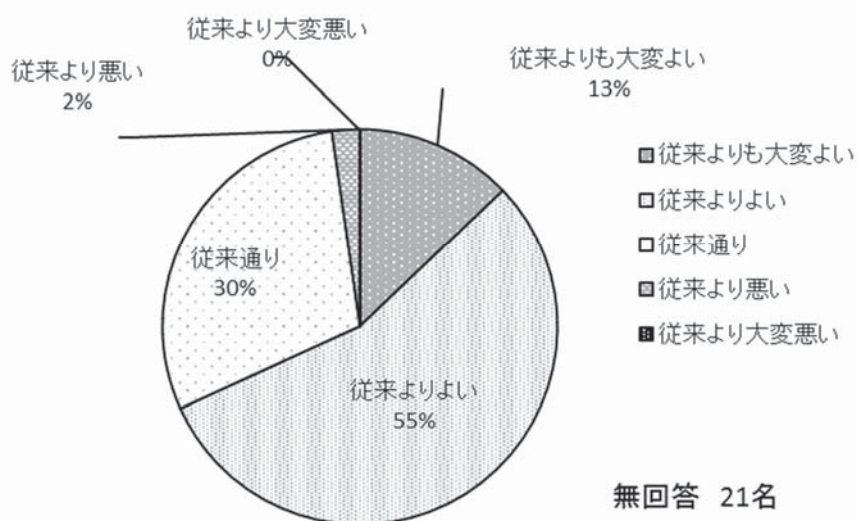
【効果的だった内容】

- 教員の実践発表
- 効果的でよい英語学習方（去年の教育課程の研修）
- 前回の教育課程のテストのような形、スピーキングを録音してチェック。
- 音読の重要性を述べた講演。
- ブラッシュアップ研修
- すぐれた実践をしている学校の授業見学。成田国際などの授業見学。
- ICTを利用したレッスン
- アクティブ・ラーニングと ICT 機器の活用に関する研修

【効果的でなかった内容】

- 教員が始終聞いている内容（一方的な講演）
- 内容というよりもパワーポイントだけを読んでいる研修

Q10 従来との比較



【Q10 の理由】

- Active Learning の具体的方法を知ることができたから。
- より教員間で英語を話す機会が増える。
- 普段授業で行うことができないので勉強になった。ただ本校での活用方法がまだ見えなかった。
- 講義型ではなかった点。
- 他の先生方と協力しながら、研修を進められた点がとてもよかったです。
- 自分に必要なこと（不足していること）を痛感できた。
- 今後の授業に具体的に使えることを実演できた点が良かった。
- 生徒の気持ちがよく分かった点では、良いと言える。
- 教員参加型の研修は、緊張もするが、実際の授業に取り入れやすい。
- より実践的で”生徒”だけでなく、”教員能力向上”にスポットライトが当たっているのが素晴らしいと思いました。
- 学校に戻った時への応用のイメージをうまく掴めなかったのが、残念です。
- 自分の力のなさを自分で気づかざるを得ない研修は初めてです。

千葉県教員研修会アンケート結果のまとめ

千葉の教員研修会は県立高校、市立高校、私立高校、定時制高校合わせて162校の参加であった。教員自身の希望に関わらず、一校あたり一名は参加、という段取りであったことが、今回、調査研究対象の他の教員研修会とは違う点である。全員が自発的な参加というわけではないからか、Q2「楽しかったですか？」に関しては、「楽しくなかった」5%、「全く楽しくなかった」1%という教員もあった。しかし、Q4（教員の資質・能力向上への効果）に関しては、「おおいに効果的」29%、「効果的」58%にもものぼった。

注目したのは、千葉県教員の皆さんが、「効果的である理由」「効果的でない理由」の記載を省略せずに、しっかり記載してくださっていた点である。アンケートから、千葉県教員の皆さんの、生徒を向上させようという熱い気持ちが伝わってきた。「効果的である理由」「効果的でない理由」それぞれの記入内容からは、即興型英語ディベートのひとつの特徴（ジャッジがいること）に関して、ある教員はその点を「効果的である」理由に挙げ、他の教員はその点に関して「効果的でない」理由、と受けとめている。

民間教育事業者としては、現場の教員の皆さんに心配をかけないように、ジャッジのありかた、やりかた、指導法を開発、伝達する必要がある。明確な審査規準、に関しては、教育界の第一人者にもアドバイスを仰ぎ、後述、分析する（3章 結果分析、考察参照）。「効果的である」と挙げてくださった長所はより伸ばし、「効果的でない」とご指摘の短所は改善してゆく道筋を、現場の教員の皆様に教えて頂いた。効果的かどうかは「勤務高校のレベルによるのでは」とのご指摘は、他地域の教員アンケートにも数名、触れられていた点であり、後述のうえ、あらためて分析、解消策を提案する（3章 結果分析、考察参照）。

2・2 沖縄県教員研修会 概要

開催日時：2016年9月30日（金）14:00-16:30

会場：県立総合教育センターIT棟

参加者：教員28名（13校）

平成28年9月29日（金）、県立総合教育センターIT棟において、「授業でできる！即興型英語ディベート」を主題とした教員研修会を行った。28名の教員に参加していただいた。

今回の研修において、前沖縄県教育長であり、現・昭和薬科大学附属高等学校・中学校 諸見里明校長にも、沖縄での教員研修会の取り組み内容を紹介させていただいた。

諸見里校長は教育指導統括監や県立総合教育センター所長などを歴任し、2013年に教育長に就任して以来、全県的な授業改善に取り組み、学力向上で実績を上げてきた。

2016年4月から、昭和薬科大学附属高等学校・中学校 校長を務めるなかで、アクティブ・ラーニングの意義を認めている。諸見里校長は、「教育長と指導主事が、教育振興と人材育成にかける思いを共有し、どのように生徒を伸ばしてゆきたいかの、ベクトルをそろえることが大事」と語った。教員が、生徒と、教員自身の可能性をあきらめずに、教員研修会を通じて、自己研鑽してゆくこと、その際に専門スキルの高い民間事業者からノウハウを学ぶ重要性についても諸見里校長は賛同している。

今回の教員研修会研修内容を知った沖縄の指導主事（自身の専門教科は国語）もこう語った。「『即興英語ディベート』のお話の中で、とても参考になる部分が多く、今後学校を訪問し、授業改善の仕事をする際、役に立つ話ばかりでした。当今、アクティブ・ラーニング流行りで、「型」に着目しがちですが、きちんと身につけさせたい力を念頭に50分で授業作りをされているところに感銘を受けました。目指すべき一つの形だな、と慧眼させられた思いでした。」

研修当日は、まず初めにディベートの概要とルールについて説明したのち、即興型英語ディベートを実際に学校の授業において導入するやり方と同じやり方で2回行った。学校の授業は50分授業であることが多いため、時間も同様の設定で実践した。教員は予め肯定チーム、否定チームにランダムに分けられ、お題（今回の研修では、1回目は「宿題を廃止すべきだ」、2回目は「コンビニエンスストアの深夜営業を禁止すべきだ」）が与えられた後、15分間の準備時間ののち、ディベートを行った。今回の研修会では、参加教員全員がディベート実践においてスピーチを行った。

当日の研修タイムスケジュール

- 14:00 開会と挨拶（県立学校教育課担当）
- 14:05 即興型英語ディベートのルール、
- 14:20 モデルディベート、授業導入事例の説明、これからの英語教育について
- 14:35 チームでの役割分担確認、1回目論題発表、1回目ディベート準備
- 14:50 1回目ディベート実践
- 15:10 ジャッジ
- 15:20 休憩
- 15:30 2回目ディベート準備
- 15:45 2回目ディベート実践
- 16:05 ジャッジ
- 16:15 まとめ、アンケート
- 16:30 閉会

当日の様子を次にまとめる。

沖縄県教員研修会 即興型英語ディベート研修

一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）

大阪府立大学工学研究科 助教 中川智皓

開催日時：2016年9月30日（金）14:00-16:30

会場：沖縄県立総合教育センターIT棟

参加者：教員28名（13校）

（普天間高校、那覇国際高校、宜野湾高校、開邦高校、八重山高校、球陽高校、那覇高校、首里高校、沖縄工業高校、北山高校、南風原高校、浦添商業高校、向陽高校）

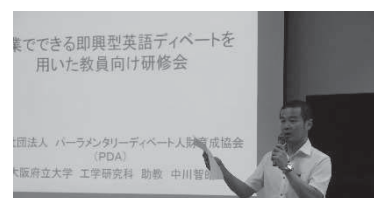
平成28年9月30日（金）、沖縄県立総合教育センターIT棟にて「授業でできる！英語ディベート」を主題とした研修が行われました。研修冒頭、伊志嶺指導主事より「今回お集まりいただいた英語科教員は沖縄の曹操たるメンバーが集いました。この場限りでなく、各校で他の先生方にもディベートの素晴らしさを伝えていただきたい。」とのご挨拶がございました。

次に中川よりディベートの概要、ルールについての講義がありました。学校の授業で導入できるディベートフォーマットの使用について、また、中教審が高校英語で「論理・表現」を新設する、科目再編の方針に伴う学校教育に於けるディベートの有用性を併せて説明しました。

引き続き専門家によるモデルディベートが行われました。論題は「授業中の内職（他の科目を勉強すること）は許されるべき」。スピーチはユーモアもあり先生方は若干緊張がほぐれた様子でした。

その後、早速教員の皆さんには生徒の立場に立ってみて、実際にディベートによるスピーチを体験していただきました。論題は、第1ラウンド「宿題を廃止すべきだ」、第2ラウンド「コンビニエンスストアの深夜営業を禁止すべきだ」でした。

15分の準備時間後、ディベートが開始されました。第1ラウンドでは話の組み立てに戸惑う先生方もいらっしゃいましたが、その後のジャッジによるフィードバックで、ほとんどの先生が要領をつかみ言いたいことを主張できました。和気藹々と2ラウンドの実践が行われました。（地域柄、かりゆしの涼しい姿でのスピーチが印象的でした）



伊志嶺指導主事よりご挨拶



専門家によるモデルディベート



真剣な面持ちでの相談



スピーチの様子



質疑応答にも即興で対応



議論の後には必ず握手

参加者の声（アンケートよりそのまま抜粋）

- 大変勉強になった。フォーマット（流れ）が分かりやすく、授業で取り入れやすいと感じた。Thank you very much.（普天間）
- 生徒も教師も自分の言いたいことを主張したり、反対の意見をきき、考えていく力が今こそ求められていると思う。ディベート（PDA）は日本政府が推進していくべきだと心から思います。（宜野湾）
- 自らの英語力でもっと向上させなければいけないとモチベーションが上がったので、とても良かったです。論理的に英語で考える機会が教師には必要だと感じました。とても良い機会でした。（那覇国際）
- 他に類を見ないタイプの研修で、これからの時代に必要な研修だったと思います。これからのがんばりたいと思える内容でした。（球陽）
- 最初はとても緊張して相手の言っていることを理解するのに必死だったが、二回目は少し落ち着いてできました。このように生徒も回をこなせば慣れてくるのでは？と思いました。とても良かったです。（那覇）
- ものすごくストレスフルでしたが、それが良かった。心臓バクバク状態で英語を話すと、生徒たちに同じことをさせているんですね。（首里）
- Very interesting, quite challenging & realistic great job.（球陽）
- 教員ですら、学校の授業以外では英語を話す機会がないため、教員が英語を話し、まとめる力が必要になる。（球陽）
- 従来も学び多く、良いのですが、今回の方が負荷を感じ、学ばなければという気持ちにさせてくれます。（首里）。
- 準備型ディベートより、より本来のコミュニケーションの場面に近く、教師としても英語学習の必要性を感じました。（首里）
- 組み立てを意識しながら英語を使うので、日常会話では体験できないスキルを磨くことができると思う。（南風原）
- とても楽しかったです。なかなかディベートはやる機会がないので、もし授業に取り入れるとしたらすごく役立つと思いました。（開邦）
- 体験でき 1 人 1 人にフィードバックがあり、学ぶことが多かった。特に自己研鑽へのモチベーションが高まる。（向陽）

2・2・1 沖縄県教員研修会アンケート

研修後、参加者へアンケートを配布し、研修の効果や研修に対しての意見を確認した。アンケート内容を次に示す。千葉県教員研修会でのアンケート結果を踏まえ、ジャッジの認定制度に関する質問項目を追加している。

9. これまでの教員研修会(本研修会を除く)で、特に効果的だった、またはあまり効果がなかったと感じられる内容をお書きください。

効果的だった内容: ()

あまり効果がなかった内容: ()

10. 今回の即興型英語ディベートに関する教員研修会は、これまでの研修会と比べていかがでしょうか。

①従来よりも大変よい ②従来よりよい ③従来通り ④従来より悪い ⑤従来より大変悪い

その理由をお書きください。

()

11. 現在、PDA ではジャッジの認定制度を導入しております。PDA 認定教育ジャッジとは、主に中学、高等学校の授業で使用されるパラメンタリーディベート(即興型英語ディベート)のフォーマットの下、教育的な指導ができる認定ジャッジのことです。この認定証を取得することに関心がありますか？

①大いに関心がある ②関心がある ③どちらともいえない ④あまり関心がない ⑤全く関心がない

12. 上記の項目で③④⑤と答えられた皆様へ

どのようになれば PDA 認定ジャッジ認定証取得に関心が高まりますか？

①文部科学省から推奨されたら ②即興型英語ディベートが授業で必須となれば

③認定証取得が教員免許更新に必須となれば ④昇進に反映されるなら

⑤給与に反映されるなら ⑥その他《 》

13. 本日の感想をご自由にお書きください。

()

14. 今後アクティブラーニング(英語ディベート)に関する情報をお伝えいたしますので、よろしければ以下に連絡先メールアドレスをご記載ください。

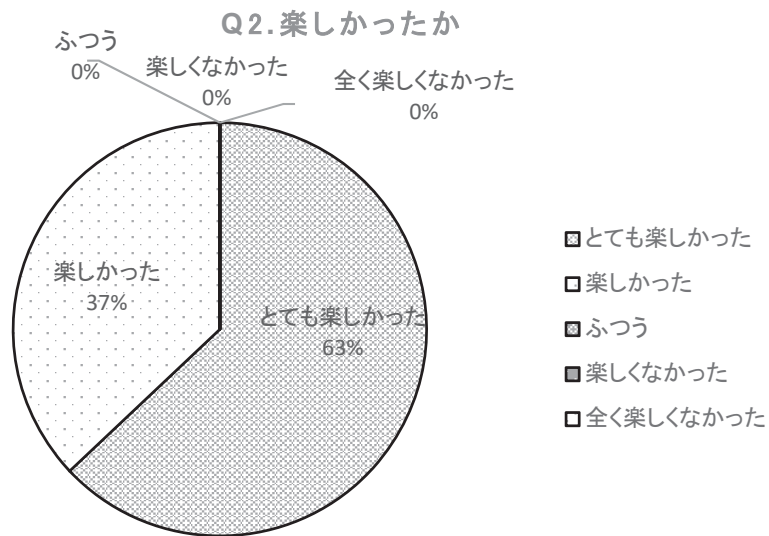
()

以上、ご協力ありがとうございました

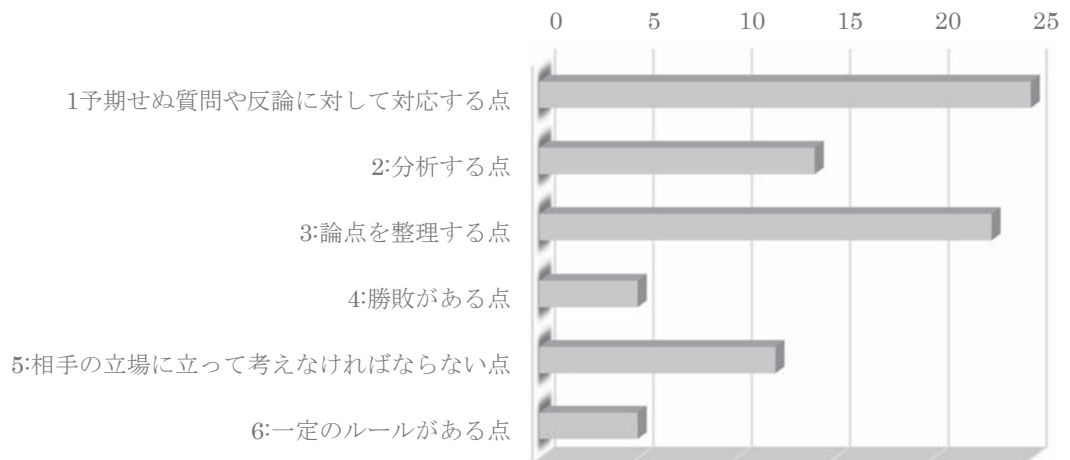
2・2・2 沖縄県教員研修会アンケート結果、まとめ
アンケート結果を以下に示す。

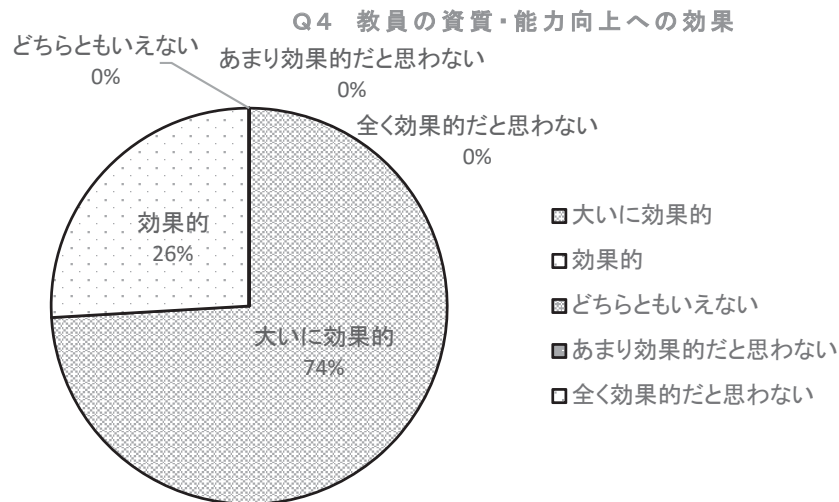
【沖縄県教員研修会アンケート結果】

※質問1に関しては、今回の研修では全員ディベーターだったため、データ集計は行っていない。



Q3 どのような点がアクティブラーニングとしての効果が高いと思うか

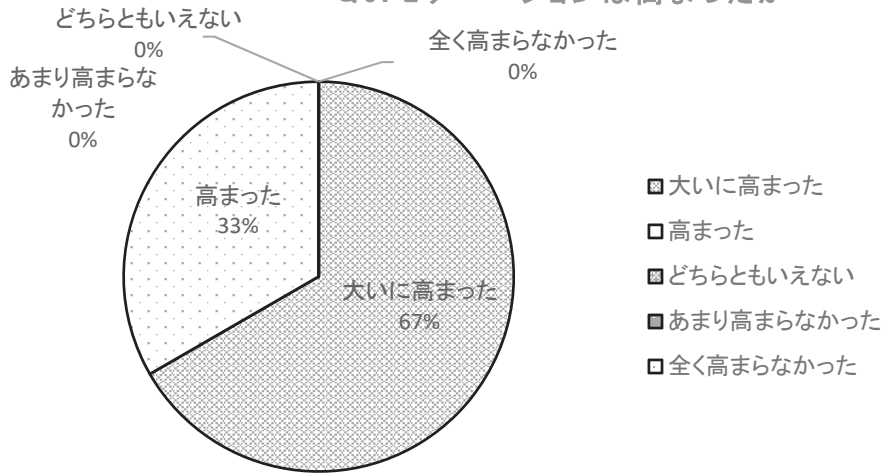




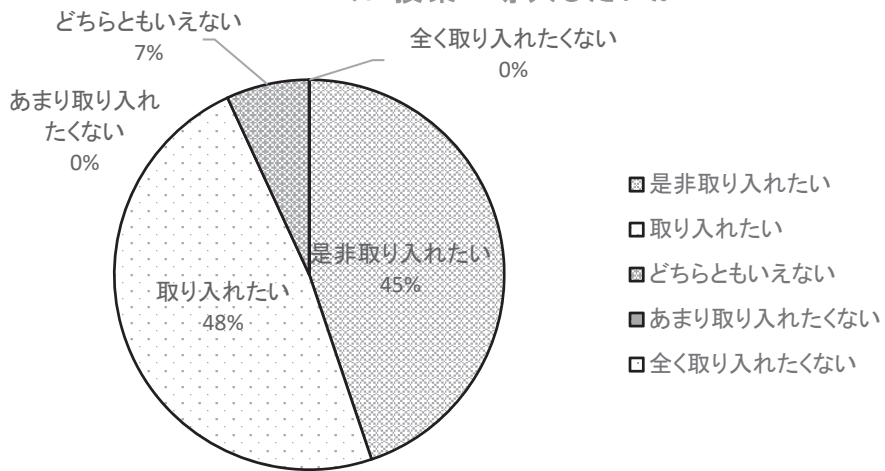
Q5 Q4 の理由（原文のまま記載）

- 即興型という点が効果的である。英語 4 skill を全て使うので、実力がつく。
- **Speaking** の向上や、社会の問題へ意識を向けることができるので、非常に良い。
- 学校では忙しすぎて、あまり英語を話す機会もなく、時間が取れず ALT とも話が出来ない。久しぶりに、自分の考えを英語で言うという作業をした。
- 社会において主体的・積極的に人と関わり、相手の意見を尊重しながら、論理的に自分の意見を伝える力は重要になってくるので、英語のディベートは、今後重要視されると思う。それを指導する立場の教員が、その経験をする事は、資質・能力の向上に繋がると思います。
- 即興で、というのは不安でしたが、やればできるかも、と思います。
- 自らの英語力をもっと向上させなければいけないと、モチベーションが上がったので、とても良かったです。論理的に英語で考える機会が、教師には必要だと感じました。とても良い機会でした。
- 準備型ディベートより、より本来のコミュニケーションの場面に近く、教師としても英語学習の必要性を感じました。
- 生徒も教師も、自分の言いたい事を主張したり、反対の意見を聞き、考えていく力が求められていると思う。ディベート (PDA) は、今こそ日本政府が推進していくべきだと、心から思います。

Q6.モチベーションは高まったか



Q7.授業へ導入したいか



Q8 Q7 であまり取り入れたくない、まったく取り入れたくないと答えた理由
(原文のまま記載)

- ジャッジトレーニングが必要だから
- 取り入れたいが、ジャッジができるか不安

Q9 これまでの教員研修会（本研修会を除く）で、特に効果的だった、またはあまり効果がなかったと感じられる内容をお書きください。

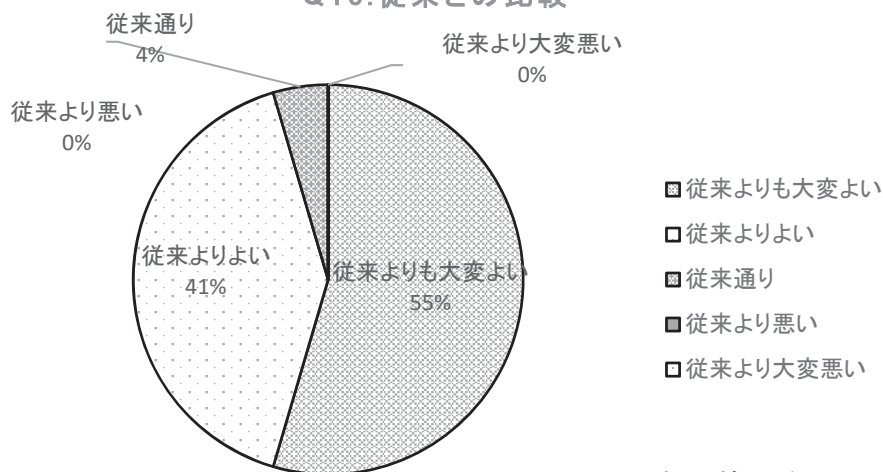
【効果的だった内容】

- 英語指導力向上研修。
- 10年ほど前に、全英語教員対象に実施された夏期研修（2week）が、とても良かった。また受けたい！
- ルーブリックの講演。
- MYC。使える授業の紹介。
- 英語指導力向上研修。ALT 指導力向上研修。

【効果的でなかった内容】

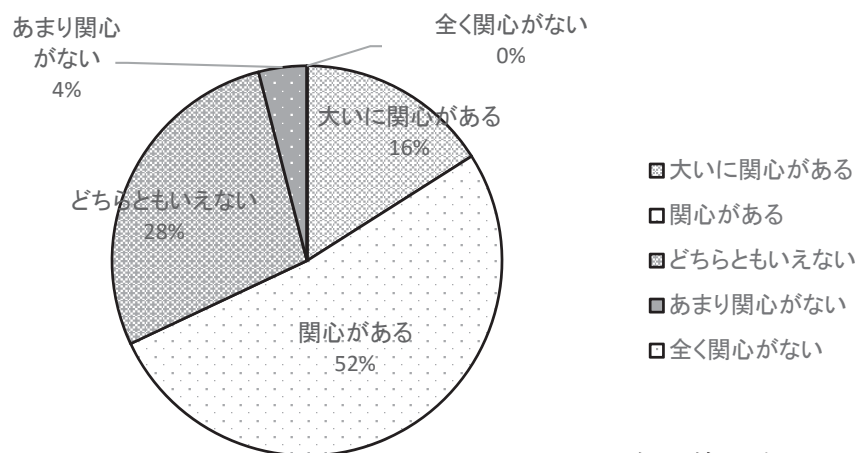
回答無し。

Q10.従来との比較



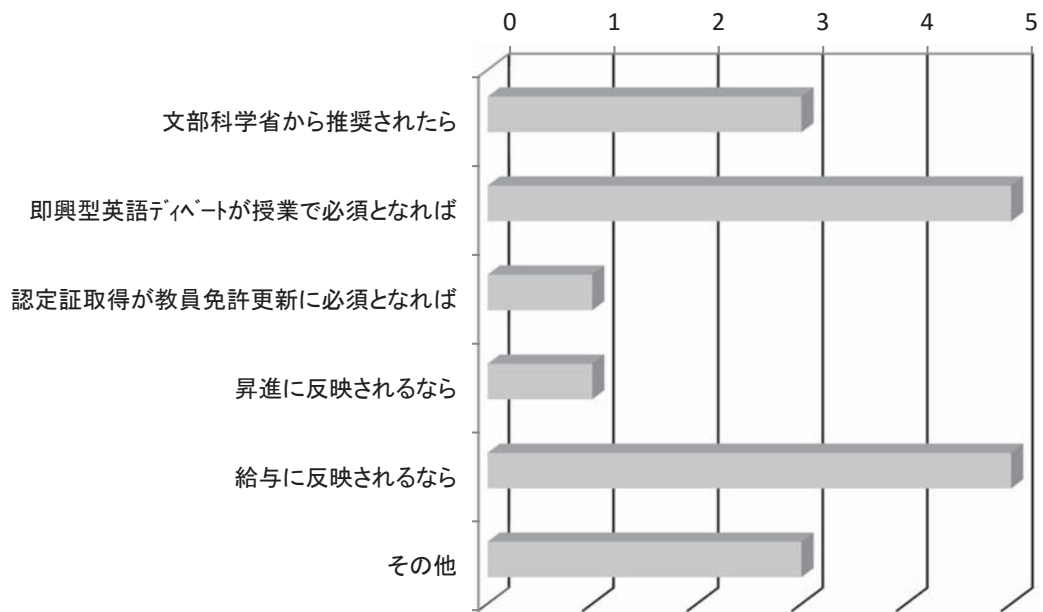
無回答 5名

Q11.PDA認定教育ジャッジ資格の取得



無回答 2名

Q12: Q11-3・4・5選択の要因



沖縄県教員研修会アンケート結果のまとめ

沖縄県における教員研修会でのアンケート結果では、

- ✓ Q2 楽しかったか：「とても楽しかった」「楽しかった」で 100%
- ✓ Q4 教員の資質・能力向上への効果：「大いに効果的」「効果的」で 100%
- ✓ Q6 モチベーションは高まったか：「大いに高まった」「高まった」で 100%

の非常に高い好回答が得られたことが特筆すべき事項と言える。当該研修会は、希望者研修であったことが大きな要因であると考えられる。

また、沖縄県教員研修会を通して、沖縄ならではの教育現場の悩みや可能性を知る機会を得た。沖縄の離島担当の教育現場の立場から、「学びたい気持ちの強い生徒さんに教育のチャンスになるだけ届けたい、それにはどうしたら」という言もあった。

このたびの調査研究事業において、千葉県の教員研修会の際に、多数の教員に対応するために、民間事業者がいくつかの教員チームをジャッジするため、遠隔通信システム（スカイプ）を使った事例を沖縄の離島担当者に伝えた。離島担当者は「スカイプを使えば、離島の生徒が教育を受ける機会が増えるのでは？」との反応であった。スカイプなどを使っての遠隔地ディベートシステム構築をすることが、沖縄にとっても大事であることが示唆された。

今後の ICT 教育の基盤構築にもなり得、生徒がスカイプ授業に慣れておけば、英語のみならず、他の教科での ICT 教育を受ける上でも準備となる。地域による教育格差の解消にもつながる可能性を秘めたシステムづくりは民間教育事業者が課題とすべき案件であり、取り組んでいきたい。

2・3 大阪府教員研修会 概要

開催日時：2016年10月7日（金）14:30-17:00

会場：大阪府教育センター

参加者：教員42名（28校）

平成28年10月7日（金）、大阪府教育センターにおいて、「授業でできる！即興型英語ディベート」を主題とした教員研修会を行った。42名の教員に参加していただいた。

研修は、まず初めにディベートの概要とルールについて説明したのち、即興型英語ディベートを実際に学校の授業において導入するやり方と同じやり方で2回行った。学校50分授業で導入できるタイムスケジュールとした。教員は予め肯定チーム、否定チームにランダムに分けられ、お題（今回の研修では、1回目は「コンビニエンスストアの深夜営業を禁止すべきだ」、2回目は「大学入試の受験生は彼氏または彼女を持つべきである」）が与えられた後、15分間の準備時間ののち、ディベートを行った。今回の研修会では、参加教員全員がディベート実践においてスピーチを行った。

当日の研修タイムスケジュール

14:30 即興型英語ディベートルール、効果の説明、授業導入例について

15:00 実践1

15:50 休憩

16:00 実践2

16:50 まとめ・アンケート

17:00 終了

当日の様子を次にまとめる。

大阪府教員研修会 即興型英語ディベート研修

一般社団法人パラメンタリーディベーター人財育成協会（PDA）

大阪府立大学工学研究科 助教 中川智皓

開催日時：2016年10月7日（金）14:30-17:00

会場：大阪府教育センター

参加者：教員 42名

参加校：28校

（東淀川高校、池田高校、春日丘高校、吹田東高校、北千里高校、阿武野高校、摂津高校、旭高校、寝屋川高校、牧方高校、牧野高校、夕陽丘高校、花園高校、八尾翠翔高校、富田林高校、長野北高校、泉陽高校、岸和田高校、福井高校、成城高校、槻の木高校、鳳高校、布施高校（定時制）、大阪学院大学高校、大阪聖母女学院、羽衣学園、プール学院中学校・高校、明星高校）



ルール説明

平成28年10月7日金曜日、大阪府教育センターにおいて、「授業でできる！即興型英語ディベート」を主題とした研修が行われました。研修の初めに、大阪府立大学工学研究科、助教の中川より、挨拶とディベートの概要、ルールについての講義が行われました。現場における授業で導入できるよう、即興型英語ディベートは50分で行われます。中教審が高校の英語で「論理・表現」を新設するなど科目を再編する方針をまとめたとおり、それに伴う学校教育に於けるディベートの有用性を確認しました。

次に、教員の皆さんにも生徒の気持ちになって、実際にディベートを体験していただきました。ディベートでは、1つのお題が与えられ、それに対して肯定チームと否定チーム、ジャッジのグループに分かれます。どのグループになるかはランダムで決められ、さらに論題が発表されてからディベート実践が始まるまでの準備時間は15分です。



POI（質疑応答）の練習



チームでの相談



スピーチと即興の質問の様子

準備時間後、早速第一ラウンドが開始されました。要領を掴むのに戸惑っている様子でしたが、その中でも POI を積極的に出すテーブルもあり、大阪の力強い商人魂を感じることができました。続く第二ラウンドでは、先ほどに比べ意見も活発に交換され、POI もさらに増えたという印象でした。二回という少ない実践ではありましたが、多くの方が伸びを感じられたようです。また、各自の教室でいかにディベートを授業に、そして生徒に取り入れられるかを質問する方が多くいらっしゃいました。スタッフジャッジによる個々人のフィードバックでは、ディベートの内容に加え、スピーチの仕方や生徒への指導の際の配慮などのコメントも伝えられました。この研修会を通じて、多くの先生方に実際に授業に取り入れてみたいと感じていただけたようです。最後の感想では、教員人生の中で一番の研修であったとのコメントも寄せられました。



POI (質問)



ディベート後の握手



スピーチの様子

参加者の声（アンケートよりそのまま抜粋）

- 2回体験できることが good でした！1回だけなら難しさを思い知って帰るだけでした…
- 特に英語力、プレゼン力、知識を得るためのリサーチ力が総合的につくと思います。
- 生徒は自ら話したいと強く実は思っているので、よい学びの機会になると考えられます。
- 実践型で、生徒の気持ち（楽しさ、戸惑い）を体感できた。
- またこのような教員同士で学びあえる機会があれば参加したいです。
- 生徒に英語を話すよう指導する側の私たちも、このようなトレーニング機会を持ち経験をつむことは貴重な体験でした。
- 4技能をうまく統合できている。なおかつゲーム感覚があってポジティブに取り組むことができた。
- コミュニケーション能力の育成のためにはコミュニケーションをとらざるを得ない状況を選択する必要があるのでよいと思いました。
- 様々なテーマについてもっと英語で意見を言えるようになりたいと、生徒たちも思うはずだと思うので、生徒のモチベーションUPにつながると確信した。

2・3・1 大阪府教員研修会アンケート

研修後、参加者へアンケートを配布し、研修の効果や研修に対しての意見を確認した。アンケート内容を次に示す。

8. これまでの教員研修会(本研修会を除く)で、特に効果的だった、またはあまり効果がなかったと感じられる内容をお書きください。

効果的だった内容: ()

あまり効果がなかった内容: ()

9. 今回の教員研修会は、これまでの研修会と比べていかがでしょうか。

(①従来よりも大変よい ②従来よりよい ③従来通り ④従来より悪い ⑤従来より大変悪い)

その理由をお書きください。

()

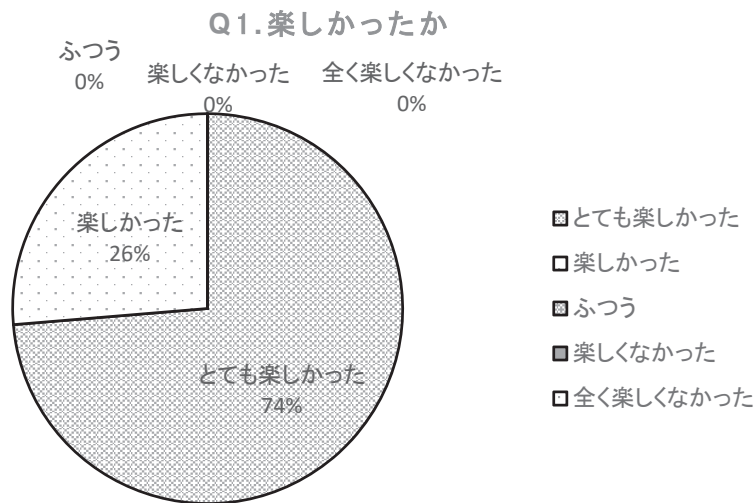
10. 本日の感想をご自由にお書きください。

()

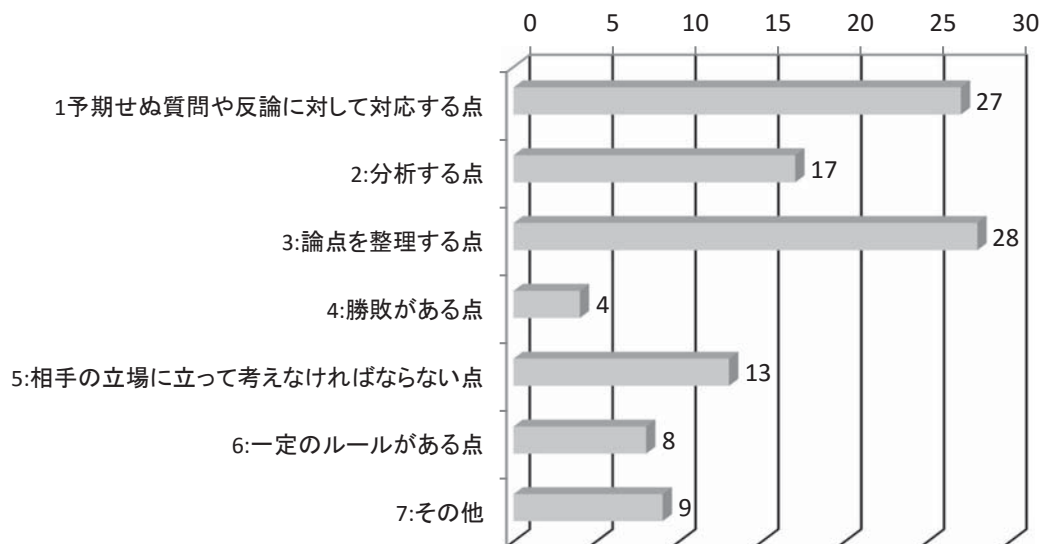
以上、ご協力ありがとうございました

2・3・2 大阪府教員研修会アンケート結果、まとめ
アンケート結果を以下に示す。

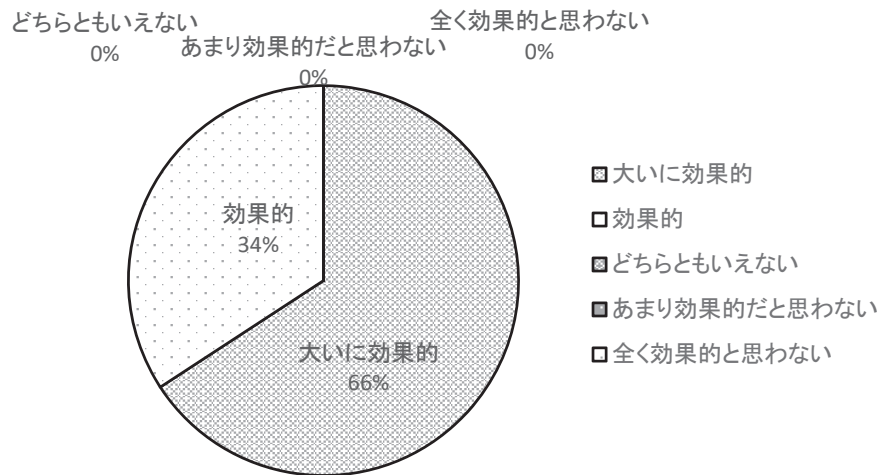
【大阪府教員研修会アンケート結果】



Q2 どのような点がアクティブラーニングとしての効果が高いと思うか



Q3 教員の資質・能力向上への効果



Q4 Q3の理由

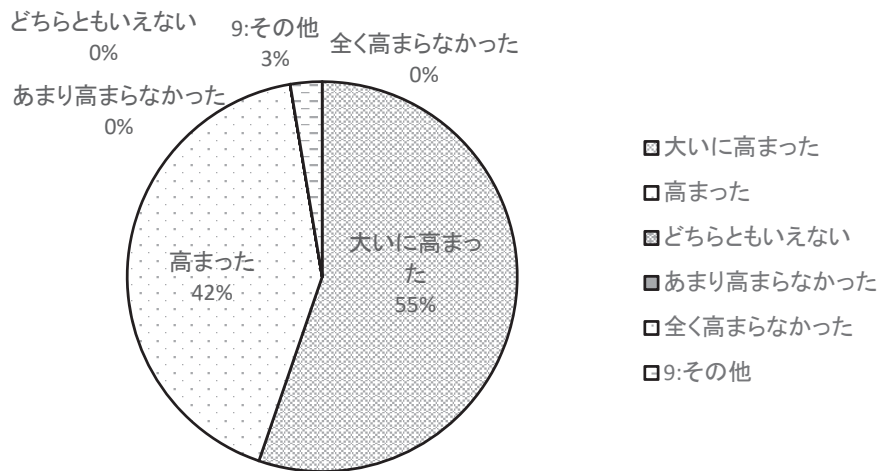
【効果的である理由】

- 自分の英語運用能力を思い知らされて、もっと学ばなければ思うので。
- 自己研鑽が必要だと感じたから。
- 教員にも又、生徒への指導にも大いに参考になった
- 生徒は自ら話をしたいと強く思っているのでよい学びの源になると考えられます。
- 生徒の立場になって考えられ、その際に大事なポイント、注意点や考え方など体感できる。
- 普段 **presentation** を行っている生徒の気持ちが分かった。根拠づけて説明する大切さが分かった。
- これから国際的な社会で多くの意見を受けとめ、発信し、**share** し合う世の中になっていくだろうから、コミュニケーション能力の育成のためにはコミュニケーションをとらざるをえない状況を提供する必要があるのではよいと思いました。
- 特に英語力、プレゼン力、知識を得るためのリサーチ力が総合的につくと思います。

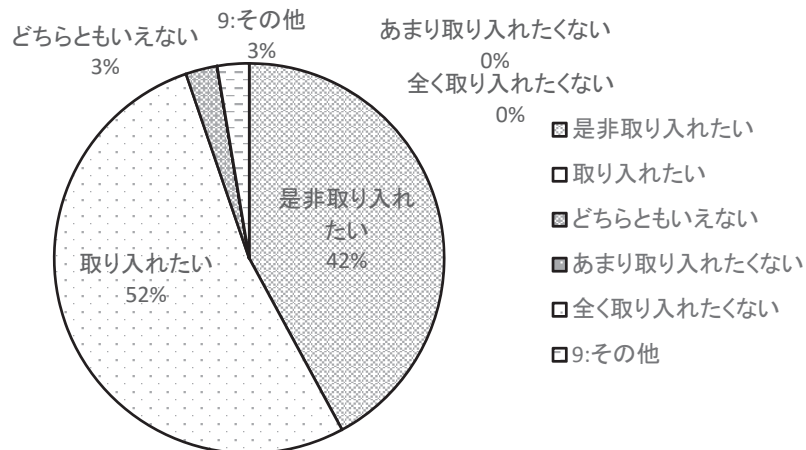
【効果的でない理由】

- まずは教員が経験しないと、生徒にさせられない。

Q5モチベーションは高まったか



Q6授業に取り入れたいか



Q7 Q6であまり取り入れたくないと答えた理由

- 取り入れたいが、英語の運用能力以前に日本語での論理のくみ立て練習が必要に。

Q8 これまでの教員研修会（本研修会を除く）で、特に効果的だった、またはあまり効果がなかったと感じられる内容をお書きください。

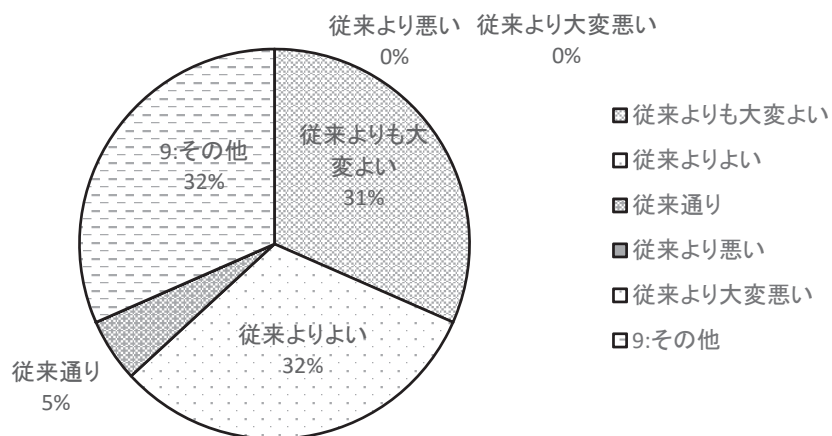
【効果的だった内容】

- オーストラリア クイーンズランド大学 TESOL研修など

【効果的でなかった内容】

- 指導要領の解説
- ファシリテート方法
- 書物をよめばわかるようなこと

Q9 従来との比較



大阪府教員研修会アンケート結果のまとめ

大阪府における教員研修会でのアンケート結果では、沖縄県同様、希望者研修であったこともあり、複数の質問項目で非常に高い好回答が得られた。特に、Q2 楽しかったかでは、「とても楽しかった」が74%を占めるなど、楽しさについては3地域において最も高い評価を得たと言える。大阪府の教員研修会で即興型英語ディベートを行い、際だっていたのは、教員の皆さんのディベート実践中の「POI（質疑応答）」への積極性であった。また、質疑応答の内容に深みがあり、的を射ていた、とのジャッジの声も多数あった。初対面の教員で組んだチームもあったのにも関わらず、15分間という短い準備時間で教員同士の連携のある、質の高いディベートがなされていた。ディベート中の議論の交流が深まることも、楽しさを高めた一要因と言えよう。

Q4の即興型英語ディベートにおける教員の資質・能力の向上について、「効果的でない理由」にあがったものは、「まずは教員が経験しないと、生徒にさせられない」との意見があった。他の地域においてもこのような意見がいくつかあった。

- ✓ 生徒に4技能を身につけさせようと思っても、教員が生徒に教えることができなければ塾などに頼らざるをえない。
- ✓ 学校教育以外で4技能を身につけさせるとなると、親の経済力次第で、その教育の機会に大きな差がでてくるのが懸念される。
- ✓ 生徒全体の4技能の底上げをしようと思うと、学校教育現場の教師力をあげる必要がある。

教員の皆さんは、自分の勤務高校特性に合った生徒の育成の仕方を模索している。高校間の学力格差や生徒間の学力差を考えると、即興型英語ディベートに取り組むことにハードルの高さを感じる教員もあるという意見をきいた。

さきにのべた沖縄の教育機会に関する地域差の対策に続いて、学力差に応じたレッスンの段取り変更、調整にも対策が必要である（3章 結果分析、考察参照）。民間事業者は教育委員会と連携し、教育現場のニーズを聞き取り、効果的な研修づくりに取り組んでゆきたい。

2・4 ヒアリング（指導主事）

教員研修を行う前に、担当指導主事と密に連絡を取り、ヒアリングを行った。ヒアリングアンケートの内容は下記である。

1. 教育委員会単独で研修を行う場合よりも、民間教育事業者の力を活用したほうがどんな点が効率的で、研修自体の成果もあがると考えられますか。
2. 教員の指導力をあげるための昨年度までの教育委員会における研修で特に、効果的、効率的であったと思われる研修内容を教えてください。
3. 逆に、あまり効果的、効率的ではなかったと思われる研修内容を教えてください。
また、どのような点が、効果的、効率的でなかったと思われますか。
(例 専門的すぎて教育現場で実際は生かすにくい、など)
4. 民間教育事業者が研修を担当する場合の懸念点や留意点を教えていただけないでしょうか。(例 あくまでも教育現場のプロを自負する教師たちに礼を失しない教え方、顔をつぶさない教え方をしてほしい、など)
5. 教育現場に「ディベートの魅力や効果を体感し、学校をあげて、生徒にも伝えていきたいと思っていただく」ために、教員の皆様のみならず、校長先生にも一部、研修を受けて頂く案も準備しておりますが、実行可能にするために、ご協力いただけますでしょうか。難しい場合はどのような代替案なら宜しいでしょうか。
6. 教育現場を知り抜いた教員と、専門スキルの高い民間事業者との連携で、よりよいプログラムをつくるには、どのような工夫が必要でしょうか。
(例 教員の皆さんへのアンケートをもとに、より意識や能力が高いと思われる教員を選び、民間事業者との会合を通じて、よりよいプログラム作りに生かしてゆく)
7. 文部科学省の調査結果に基づくとスピーチやプレゼンテーションに比べるとディベートやディスカッションの実施割合が低すぎる、という結果がでております。この改善がインタラクティブなコミュニケーション能力育成には不可欠です。そのモチベーションをあげるために、教員研修結果を判断し、特定の能力や意識が高いと思われる教員を選んで、可能な範囲内で、追加会合（含 スカイプ）を行っても宜しいでしょうか。

8. このディベートプログラムを用いた授業を高校で行うとしたら初任者等若手の教員養成も含めた学校体制で、OJT（On the job training 職務遂行を通じた研修）の推進を図るうえでどの程度有意義だと思われますか。

該当するものを以下からお囲みください。

- (①大いに意義がある ②意義がある ③どちらともいえない ④あまり意義がない
⑤全く意義がない)

下記は、上記ヒアリングアンケートに対する研修担当指導主事の回答である。

(個人名はふせ、順不同)

1. 教育委員会単独で研修を行う場合よりも、民間教育事業者の力を活用したほうがどんな点が効率的で、研修自体の成果もあがると考えられますか。

- 民間事業者の力を活用することは効率的極まりない。民間事業者はスペシャリスト。教育に関する方向性、ベクトルを、教育現場と揃えることで相乗効果を生むことが期待される。ただし、教育委員会と民間事業者との事前のすり合わせが大事。意見交換をすることで、着地点を共有したうえでならば、素晴らしい相乗効果を生む。教育委員会主催でも大学の教授や、民間のスペシャリストを講師として招聘した場合、壁が少なく、講義や研修に素直に耳を傾ける参加教員が多い。
- 教育分野以外の視点から、専門的な知識や豊富な経験を生かした研修が可能になる。
- 特に、英語のディベート活動等、専門的な知識を必要とする活動に関する研修を行う場合は、民間教育事業者や大学等の専門機関の力を活用して実施した方が、より効果的で内容の深いものになると考える。
- 教育委員会単独で研修会を行うと、現場の先生方との「壁」が少なからずある。その点、教育委員会主催でも、大学の教授や民間教育事業者から講師を招聘した場合には、そういったものが少なく、素直に耳を傾ける参加者も多いように感じられる。

2. 教員の指導力をあげるための昨年度までの教育委員会における研修で特に、効果的、効率的であったと思われる研修内容を教えてください。

- 教員自身のレベルアップおよび指導力向上につながる講義、ワークショップなど
- 「県による指導力向上事業」と銘打って、①小学校外国語活動中核教員養成研修 ②中・高等学校英語科教員指導力向上研修 ③CAN - DO リスト活用推進会議 ④ CAN-DO リスト活用研修会⑤外国語指導助手・日本人外国語担当教員指導力等向上研修会 等を実施した。中でも、②、③、④の研修については効果があったと考えている。②は学校種別にいる「英語推進リーダー」の教員が中心になり、文部科

学省主催の中央研修で学んできた内容を一般の英語教員に伝達講習を行うものであり、②、③については CAN-DO リストの意義とその作成方法、そして活用方法までを大学教授等の講演も含め、細かく指導していく研修である。

- 平成 25 年度よりカリフォルニア大学より講師を招へいし、外国語科・国語科の教員を対象としたレクチャー（評価のパラダイムシフト）及びワークショップ（言語教育におけるパフォーマンス評価）を開催している。パフォーマンステストを実施する上で、教員が抱えている悩みやノウハウについて、レクチャーとワークショップを通して学ぶことができるので、毎回参加者からも好評を得ている。また、毎年開催しているので、年間を通して現場で実践し、研修会で講師へ報告、質疑等を行っている教員の姿も見られる。

3. 逆に、あまり効果的、効率的ではなかったと思われる研修内容を教えてください。
また、どのような点が、効果的、効率的でなかったと思われますか。
(例 専門的すぎて教育現場で実際は生かすににくい、など)

- 特になし
- 実施した研修は、それぞれ何らかの改善効果はあったと考えている。

4. 民間教育事業者が研修を担当する場合の懸念点や留意点を教えていただけないでしょうか。(例 あくまでも教育現場のプロを自負する教師たちに礼を失しない教え方、顔をつぶさない教え方をしてほしい、など)

- 民間教育事業者が学校現場を理解しているかどうか。教職員は教科指導だけでなく、進路指導、生徒指導、部活動など様々な業務を抱えており、自治体が変われば課題やシステムが異なることが多い。逆に他の自治体の取組などを紹介するなど、プラスの面もある。
- あまり専門的になりすぎず、専門知識がない教員にも理解できる言葉で、できるだけ分かりやすい説明をしていただきたい。
- 民間教育事業者には、教育現場のジレンマも理解してもらいたい。『受験英語』と、『使える英語』のずれがあることは、教育現場の大きなジレンマである。

■ 人権に配慮した表現

5. 教育現場に「ディベートの魅力や効果を体感し、学校をあげて、生徒にも伝えていきたいと思っていただく」ために、教員の皆様のみならず、校長先生にも一部、研修を受けて頂く案も準備しておりますが、実行可能にするために、ご協力いただけませんでしょうか。難しい場合はどのような代替案なら宜しいでしょうか。

■ 県内全校の校長を集めて、英語ディベートだけの研修会を行うのは難しいと考える。県内の英語拠点校（ALTが1人以上常駐している学校）の会議の中で、当該高校の校長に対して参加希望を取って実施するという形であれば可能かもしれないが、今まで校長を対象とした英語の研修というものを実施したことがないため、実施可能かどうかははっきりとは判断しかねる。

■ 校長を対象とした当該研修の本県での実施は難しい。

■ 研修の内容などが明確になった時点で、校長研修を所管している担当者の紹介は可能である。

6. 教育現場を知り抜いた教員と、専門スキルの高い民間事業者との連携で、よりよいプログラムをつくるには、どのような工夫が必要でしょうか。
(例 教員の皆さんへのアンケートをもとに、より意識や能力が高いと思われる教員を選び、民間事業者との会合を通じて、よりよいプログラム作りに生かしてゆく)

■ 必要に応じて、事前・事後の情報交換を行う。

■ 実施後のアンケート結果を見ながら、研修内容を改善していくとともに、研修前に教育委員会の担当と十分に打合せを実施すること等が必要だと考える。

■ 学校現場で即効性のある事例や取組などを期待して、研修会に参加する教員が多い。そのため、レクチャーだけでなく、実際に学校現場で使えるワークショップを取り入れた研修会は、参加者の満足度も高い傾向がある。民間事業者については、論理だけでなく実例を伴う研修会を心がけてもらいたい。

7. 文部科学省の調査結果に基づくとスピーチやプレゼンテーションに比べるとディベートやディスカッションの実施割合が低すぎる、という結果がでております。この改善がインタラクティブなコミュニケーション能力育成には不可欠です。そのモチベーションをあげるために、教員研修結果を判断し、特定の能力や意識が高いと思われる教員を選んで、可能な範囲内で、追加会合（含 スカイプ）を行っても宜しいでしょうか。

- 基本的に教育委員会で企画・運営される教員研修では、教員研修結果から判断した一部の能力の高い或いは意識の高い教員のみを集めて行うことはできないと考える。
- コミュニケーション能力の育成を図るための取組や研修は行っており、今後の研修として位置付けた形での追加は難しいと考える。
- 校務に支障が無いことと、所属長の了解が得られるのであれば、問題ない。

3 結果分析（考察）

即興型英語ディベート研修プログラムの実施、教員アンケートの結果より、以下のことが明らかとなった。

- 提案した即興型英語ディベート研修プログラムは、教員が時代の変化に対応した教育に向けての自己研鑽するモチベーションを高める。
（モチベーションを「大いに高める」「高める」の割合（「どちらとも言えない」を含まない）は、希望者研修ではほぼ 100%、全員研修で 81%のアンケート結果。）
- 提案した即興型英語ディベート研修プログラムは、従来の教員研修と比べてよい。
（「従来より大変よい」「従来よりよい」の割合（「従来通り」を含まない）は、3 地域の平均約 76%のアンケート結果）
- PDA 認定教育ジャッジの資格取得に興味のある教員が一定数存在する。
（上記資格取得に「大いに興味がある」「興味がある」（「どちらとも言えない」を含まない）は、アンケートを取得した地域において 68%の結果。）

即興型英語ディベートの研修プログラムは、教員自身がディベートの実践をすることが特長であり、このように教員自身がアクティブ・ラーニングできる環境が与えられることが、自己研鑽するモチベーション維持や学び合う、高め合う意欲につながったと考えられる。また、このような教員参加型の研修が従来よりもよい点の一つであることも明らかになった。このことは、即興型英語ディベートに限らず、他の内容の研修においても応用できる結果と言える。つまり、教員自身が研修にて、生徒役となり質の高いアクティブ・ラーニングを行うプログラムの提供で、モチベーションや満足度が上がると考えられる。さらに、生徒へ即興型英語ディベートの指導また評価を行う上で、指導者の養成も急務であるが、その一助となりうる教育ジャッジ資格についての関心を持っている現場の教員が一定数いることが分かった。よって、4 章提言に述べる教育ジャッジ認定制度の活用も現実味を帯びる。

次に、各地の指導主事のヒアリング結果の考察を行う。3 地域各々のヒアリング結果では、各質問事項に対し、似たような回答である場合と、フットワークの軽さなど差異が生じる場合があることが分かった。各々の教育庁による教員研修には、各々の考え方や地域性を踏まえて民間事業者が連携していくことが重要であることが示された。しかし、いずれの場合も、即興型英語ディベートを習得していく研修の重要性に賛同されており、より効果的な研修のために、教育の時代にあった指導方法と現場の声をよく研究することが大切であると言える。

「教育委員会単独で研修を行う場合よりも、民間教育事業者の力を活用したほうがどんな点が効率的で、研修自体の成果もあがると考えられるか」に関しての意見は以下である。

- 「民間事業者の力を活用することは効率的極まりない。民間事業者はスペシャリスト。教育に関する方向性、ベクトルを、教育現場と揃えることで相乗効果を生むことが期待

される」

ただし、その場合の留意点をヒアリングしたところ、

- 「教育委員会と民間事業者との事前のすり合わせが大事。意見交換をすることで、着地点を共有したうえでならば、素晴らしい相乗効果を生む」

との指導主事の言もある。

民間教育事業者が教育委員会と連携して研修会を行う場合の留意点を尋ねると、

- 「民間教育事業者には、教育現場のジレンマも理解してもらいたい。『受験英語』と、『使える英語』のずれがあることは、教育現場の大きなジレンマです」

との意見もあった。教育委員会単独で研修を行った場合、現場の教員との「壁」が少なからずあるようだ。しかし、

- 「教育委員会主催でも大学の教授や、民間のスペシャリストを講師として招聘した場合、壁が少なく、講義や研修に素直に耳を傾ける参加教員が多い」

との指導主事の声もあった。

また、教育委員会ならびに教育現場は多用で、英語教育のみを担当しているわけではなく、生徒の全方向的な成長に寄与するための研究に余念がないことを、私たち PDA は、指導主事や高校教員の皆さんへのヒアリングで実感した。よって、教育委員会や高校教員の皆さんが、民間教育事業者の専門に特化したスキルを活用することで、生徒とじかに向き合う時間や気持ちの余裕をより多く生み出すことにも貢献できる可能性を生む。

新しい学習方法に対して、十分な指導ができる教員がかなり少ないのが現状であるが、現場教員の日々の業務が多忙である理由を背景に、新たな課題に対する指導法を自己研鑽してゆくモチベーションがあがらないのも課題である。今回の教員研修では、教員同士がチームを組んで、即興型英語ディベートに取り組むことで「教員同士で学び合い、高めあうモチベーションがあがった」との声も多くいただいております。「日ごろ、評価される側の生徒の気持ちがあった」「この研修を続けて受けてゆけたらもっと教員の指導力があがる」「新たな指導要領に対応した授業のやり方のモデルを示してもらえて良かった」などの声もあった。

一方、「即興型英語ディベートを行う場合、話をする側の役割は果たせるが、自分がジャッジ（審査員）をするとすると、どんな観点で判断すれば良いのか、自信がない」、「アクティブ・ラーニングが大事であることはわかるが、新しい授業形式を取り入れようと思うと、専門家のサポートがいるし、そのための予算が学校にあるのかどうか」「進学校か、そうでないかによっても、生徒が実践する場合の配慮が必要」などの懸念もでた。これらの懸念に関しては、提言で対策案を述べたい。

なお、今回の調査研究を通じ PDA の千葉県教員研修会の内容が、「指導主事通信」に紹介されるなどの反響も呼んだ。教育現場の声を聞きながら現場の状況を理解し、教育委員会と連携して、研修内容を浸透、更新させていく継続的な取り組みが必要である。今後も、定期的な即興型英語ディベートの教員研修会を行い、各地でのサポートを行ってゆく。

3・1 筑波大学附属駒場中・高等学校（高校での導入の様子）

今回の調査研究を分析するにあたり、PDAの即興型英語ディベート教員研修会に参加した教員の所属高校での授業導入の様子、反響などを通じて、即興型英語ディベートの効果についての検証を以下に紹介する。

一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)の教員研修会の教育効果について

筑波大学附属駒場中・高等学校 須田 智之

先日、11月19日に行われた本校の第43回教育研究会では、ここ数年に渡って取り組んでいる即興型英語ディベートの手法を用いた英語授業の集大成として、「即興型英語ディベート」(高2)の公開授業を約100名の教員・学生の参加者の皆さんにご覧頂いた。以下にこれまでの指導の経過を振り返る。

本校では高校2年生のコミュニケーション英語Ⅱ(4単位)の1時間をネイティブ講師とのTeam Teachingに充てており、内容としてはディベートを含むSpeaking活動に重点を置くことになっている。しかしながら、過去6年間を振り返ってみると、その指導には大変苦勞したと言わざるを得ない。その一番大きな理由は、担当教員に英語ディベート経験がなかったことである。

このような状況を一変させてくれたのが、一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)の教員研修会であった。本校からは、2014年度より、毎年夏に開始されている合宿・大会に継続して複数名の教員が参加させて頂いている(2014年度には上記の授業を担当していた同僚が単独で、2015年度にはその同僚と筆者が2人で、そして2016年度は筆者が単独で参加した)。

PDA教員研修会の最大の利点は、学校の50分の授業で使用可能なPDAフォーマットに基づいて教師自身が英語ディベートを体験できることである。最初は3分間というスピーチ時間がとても長く感じられるが、対戦を重ねるごとに徐々に上達する(アウトプットの機会、英語スピーキング力)。それ以外にも、準備時間にチーム3人で協力して論点を考え出す楽しさ(協同学習)、論理立ててスピーチを構成しようとする力(論理構成力)、ディベート対戦中やジャッジを務める際にスピーチの要点・主張を的確に把握する力(英語リスニング力)、更に長いスパンでは新聞やニュースへの関心が高まる(知識)など、様々な要素が統合的に強化されること、英語ディベートがまさにアクティブ・ラーニングそのものであることを、参加している教師自身が体験できるのである。

研修会への参加を踏まえて、本校では2014・2015年度は2学期に重点的に、2016年度は年間を通して即興型英語ディベートの指導を行ってきた。また、今年度1学期終了後に実施した「学習者の感じる英語力伸長に関するアンケート」の結果からは、英語の文法力の

数値は低かったものの、知識教養・論理的思考・英語の語彙力・英語を聞く力・英語で発表する力の全てで学習者が高い効果を実感していることが分かった。更に、約 85%の生徒達が「即興型英語ディベートは将来役に立つ」と回答していたことから、即興型英語ディベートは教育現場において、その効果が大いに期待できるといえる。

自らが英語ディベートを授業に取り入れる様になって分かった事であるが、本校でもかつてそうだった様に、中学・高等学校の英語教育の現場では、英語ディベートの経験（選手・指導者）のある英語教師は、一部のクラブ活動などで指導に当たっている例外を除いて殆ど皆無である（英語ディベートを授業で実施したことのある教員は中学では全体の 3.7%、高校では 5.3%）。新指導要領では「論理・表現」（ディスカッションやディベートを念頭に置いた科目）の設置も検討されていると聞くが、その為にも英語ディベートを指導できる教員の養成は欠かせない。特に、英語ディベートの楽しさはそのゲーム性であり、勝敗を正しく判定できるジャッジの育成は急務である。認定が開始されている PDA 教育ジャッジの資格や教員研修の機会などが、大学での教員養成課程や教員免許状更新講習などにおいて採択・活用され、即興型英語ディベートが広く普及していくことが、現状の日本の英語教育の改革にとって急務であると考えられる。

3・2 有識者コメント（京都大学教授 溝上慎一先生）

今回の調査研究報告書を踏まえ、京都大学高等教育研究開発推進センター教授・教育アセスメント室長（大学院教育学研究科兼任）溝上 慎一先生に助言をいただいた。溝上教授は高等教育・高大接続（学生の学びと成長、アクティブ・ラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション）が専門。今回は、特にアクティブ・ラーニングの視点から、本調査研究を俯瞰していただいた。

**京都大学高等教育研究開発推進センター教授
教育アセスメント室長（大学院教育学研究科兼任）
溝上 慎一**

「アクティブ・ラーニング」の視点から、「個→協働→個」のサイクルを重んじる学習プロセスが、「即興型英語ディベート研修」にも組み込まれており、このプロセスが、主体的で、対話的な学びにつながっていると見える。

効果的なアクティブ・ラーニング型研修を目指すには、「個（個人が何を考えたか）→協働（他人と考えを共有し自分の考えを深める）→個（個人の考えを発展させる）」の学習サイクルが、研修プログラムに網羅されていることが必要である。「即興型英語ディベートプログラム」では、チーム内で、「個→協働→個」のサイクルで学ぶと共に、対戦チームとも「個→協働→個」のサイクルを経て切磋琢磨できる点が出色であるといえよう。

社会に出てからもプロジェクトで協働する機会は多くある。プロジェクト内協議や交渉にあたっては、単に、自分の考えをプレゼンテーションするという「発信」だけでは不十分で、反対意見にも耳を傾ける姿勢がなくてはならない。その姿勢があつてこそ、発言者の話を真摯に聞こう、と聞き手に前向きな思いが生まれる。発言者も、相手に聞いてもらっている、という手ごたえがあつたならば、それまで思ってもいなかった良い意見が生み出せる場合があり、そこに相手との創造的関係が出てくる。このように、社会に出てから起こりうる場面に、即興型英語ディベートでの学びが生きてくる可能性はおおいに認められる。

学校から、仕事・社会への移行を鑑みるに、個（知識・思考力等）と協働（チームワーク、議論）のバランス感覚を鍛えることで、深い議論ができるようになる生徒の能力を伸ばす事は、高校教員にとって極めて大事な役割といえるのではなからうか。生徒の能力を伸ばすには、まず、高校教員の皆さん自身が教師力を向上させることが大事である。

各教育委員会と民間事業者が連携した今回の即興型英語ディベート研修会が各地の教員の皆さんにどのように受けとめられ、どのように教師力向上に貢献したのかを、研修会アンケート結果を通して見せてもらった。特にアクティブ・ラーニングの視点から注目したのは、教員研修会のアンケートの Q3 「どんな点がアクティブ・ラーニングとしての効果が高いと思うか」の設問への結果である。アクティブ・ラーニングの視点からは、討論において

も、「話す力（発表）」と「聞く力（傾聴力）」の両方が大事である。そこで、この Q3 設問の答えでは「予期せぬ質問や反論に対して対応する点」と「相手の立場にたって考えなければならぬ点」に注目した。この 2 項目に関して「効果が高い」と答える教員の割合は各地、比較的高かったのでアクティブ・ラーニングの一形態としての「即興型」英語ディベート研修の満足度は高かったといえるのではなかろうか。

民間事業者が、教育委員会と連携して効果的な研修会を運営してゆく上での今後の課題と思われることを数点述べる。ディベートの勝ち負けのみならず「傾聴力」の大切さを重んじ、伸ばすことができるよう、「聞く態度」も指導してゆくこと。討論の勝敗を決めるにあたっては、「印象点」であってはならないので、明確な審査規準が必要である。この審査規準こそが教育現場の生徒たちの指導の観点となる。また、審査規準に基づいて適切な評価ができる専門家の養成も大事である。即興型英語ディベートを学校で導入実施するにあたり、生徒のレベルに応じたサポートプログラムや体制が要ると思われる。

即興型英語ディベート研修によって、高校教員の能力向上に貢献すると共に、教員の皆さんが授業のなかで、どんな即興性を必要とされているか（教員が予想していなかった質問を生徒がしてくる等）を聞き取り調査するなどして多くの高校の実情を知る。（教育委員会との連携）

「即興型」といえども、討論に入る前に 15 分間の準備時間が設けられているので、その間、チームで効果的な協働ができる時間の使い方を研究、指導する。これにより、討論の参加者全員が効果的なアウトプットできる後押しとなる。

以上の課題に取り組みつつ、教育現場と専門家である民間事業者とが連携して「何のための教育か」を念頭に置き、「このグローバル化社会において生徒に力強く社会に羽ばたいてほしい」という夢を共有しつつ、おおいに研修事業の開発に邁進してもらいたい。

3・2 有識者コメント（日産自動車副会長 志賀 俊之氏）

前節では、京都大学溝上教授に、生徒をグローバル社会に送り出す立場から見解を述べて頂いた。次に、生徒をグローバル社会に迎える立場である産業界、実業界のリーダーから本調査研究についての助言を仰ぐ。

一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）アドバイザー、志賀 俊之氏（日産自動車取締役副会長、産業革新機構代表取締役会長 CEO、中教審委員）からこの調査研究事業で得られた結果をもとに、即興型英語ディベートについて、中教審委員の観点、また生徒がグローバル社会に出るための視点から、助言をいただいた。志賀氏の見解は次のとおりである。

日産自動車取締役副会長、産業革新機構代表取締役会長 CEO、中教審委員

志賀 俊之

私が副会長を務める日産自動車は、海外の販売は既に8割を超えている。いわゆるグローバル企業に位置づけられるが、その中でも日産は国籍に拘らずグローバルに最適な人材を活用するグローバル人材マネジメントを行っている。こうした企業では、残念ながら日本人従業員は外国人人材の前で存在感を発揮することがなかなか難しくなっている。更に、日本企業は国際的に活躍できる人材の採用に苦勞をしており、正にグローバル人材の育成は日本にとって喫緊の課題と言える。私が中教審の委員を引き受けたのも、教育を通じたグローバル人材の育成に関心があったからである。

私が求めるグローバル人材とは、自分の考えをしっかりと自分の言葉で表現し、相手の意見を十分に理解し、その違いを明確にしたうえで、議論を通じてお互いが納得する答えを導き出す力を持った人材である。しかもそれを英語でやる必要がある。自分の考えを自分の言葉で英語で表現する。この訓練を出来る限り若い時から行っていくことは、グローバル人材育成にとって非常に有効である。

「即興型英語ディベート」は正にそうした機会を学生たちに提供できる。しかも即興型なので、日ごろから社会課題、時事問題に精通しておかなくてはならない。更に、その課題に対して、肯定するか反対するかは直前に決められるので、どちらのストーリーでも主張することが求められる。また世界大会等の機会に、異文化の同年代の人たちと意見を交わすことができ、多様性を学ぶ非常に貴重な機会にもなる。

是非、この活動を日本全国に広げ、英語力の底上げだけでなく、自分の考えを自分の言葉で表現する能力が向上させられることを期待している。

志賀氏は、日産とルノーとの提携の立役者であり、英語と中国語も堪能。2016年1月に開催された第1回PDA高校生パラメンタリーディベート世界交流大会では英語でキーノートスピーカーも務めた。志賀氏はまさに、グローバル社会と日本教育界の結節点を担う存在である。

いま、世界で求められているグローバル人材について、「自分の考えをしっかりと自分の言葉で表現し、相手の意見を十分に理解し、その違いを明確にしたうえで、議論を通じてお互いが納得する答えを導き出す力を持った人材。しかもそれを英語でやる必要がある。」と志賀氏は述べている。

経済の多様化、価値観の多様化、情報通信技術の発達、環境問題の顕在化、などに直面している日本で時代の流れに対応し、力強く社会で活躍しつつ生きてゆく人材を目指すには、社会に出る直前にあわてて詰め込んでも身につかない能力ではなかろうか。理系、文系問わず、将来必ず要る能力だからこそ、高校の授業のなかでまとまった時間に学び、繰り返し訓練することが大事な思考の型ともいえる。

即興型英語ディベートでは、「ある論題に対して、肯定するか反対するかは直前に決められるので、どちらのストーリーでも主張することが求められる。」ため、たとえ、自分の本来の意見が肯定派だったとしても、否定派として議論することで、今まで考えたこともなかった相手の主張のストーリーを発見することもある。これが、新しいイノベーションを生み出すきっかけにもなり得る。技術革新によって失われる職業、新たに生まれる職業がある。その人独自の能力や、個性が人材としての価値となる時代において、相手の立場に立ちつつ、これまで気付かなかった視座を、この即興型英語ディベートで得るチャンスに恵まれることは、社会に出たときの大きなジャンプボードになるであろう。

学校から仕事、社会へのトランジション（移行）課題の解決についても、グローバル企業の先達、志賀氏の見解を鑑みるに、学校への即興型英語ディベートの普及が急務であると心得、私たちPDAは、その専門の民間事業者としての責任と役割を重く受けとめる。

4 提言

即興型英語ディベートの教員研修プログラムの実施、および参加教員、指導主事、教育委員会、有識者からの意見を踏まえ、次の2つの提言を行う。

- (1) 教育委員会、教育現場と民間教育事業者の連携強化による、教員の資質能力向上への貢献
- (2) 即興型英語ディベートに関する教育ジャッジ（審査員）認定制度の活用

- (1) 教育委員会、教育現場と民間教育事業者の連携強化による、教員の資質能力向上への貢献

教員の資質能力向上への貢献には、教育委員会、教育現場と民間教育事業者の連携を強化することが効果的である。特に、民間事業者の独りよがりにならない研修内容の精査が必要である。留意点は以下の2点ある。1. 高校の特性に応じて、即興型英語ディベートをする前に、スモールステップになるアクティビティをいれるなどの工夫を行う。ただし、スモールステップばかりに重きを置くと、例えば短い会話といった従来通りの指導法のみで終結してしまう可能性が高いため、何のための取り組みであるのかを常に念頭においたプログラムの作成が必要である。2. 地域によっては、遠隔地を通信で結ぶスカイプ等を通じて、教育の機会を提供する。図 4.1 に効果的な教員研修の流れ、図 4.2 に連携図を示す。

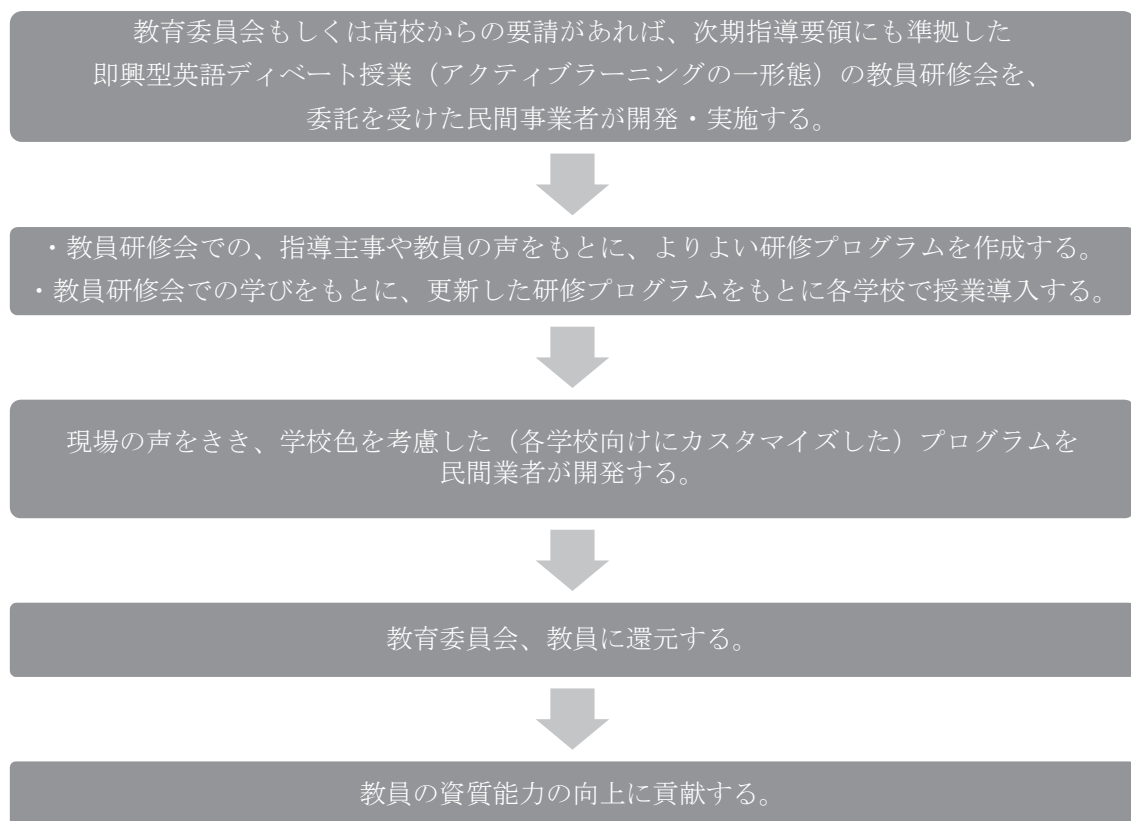


図 4.1 効果的な教員研修の流れ

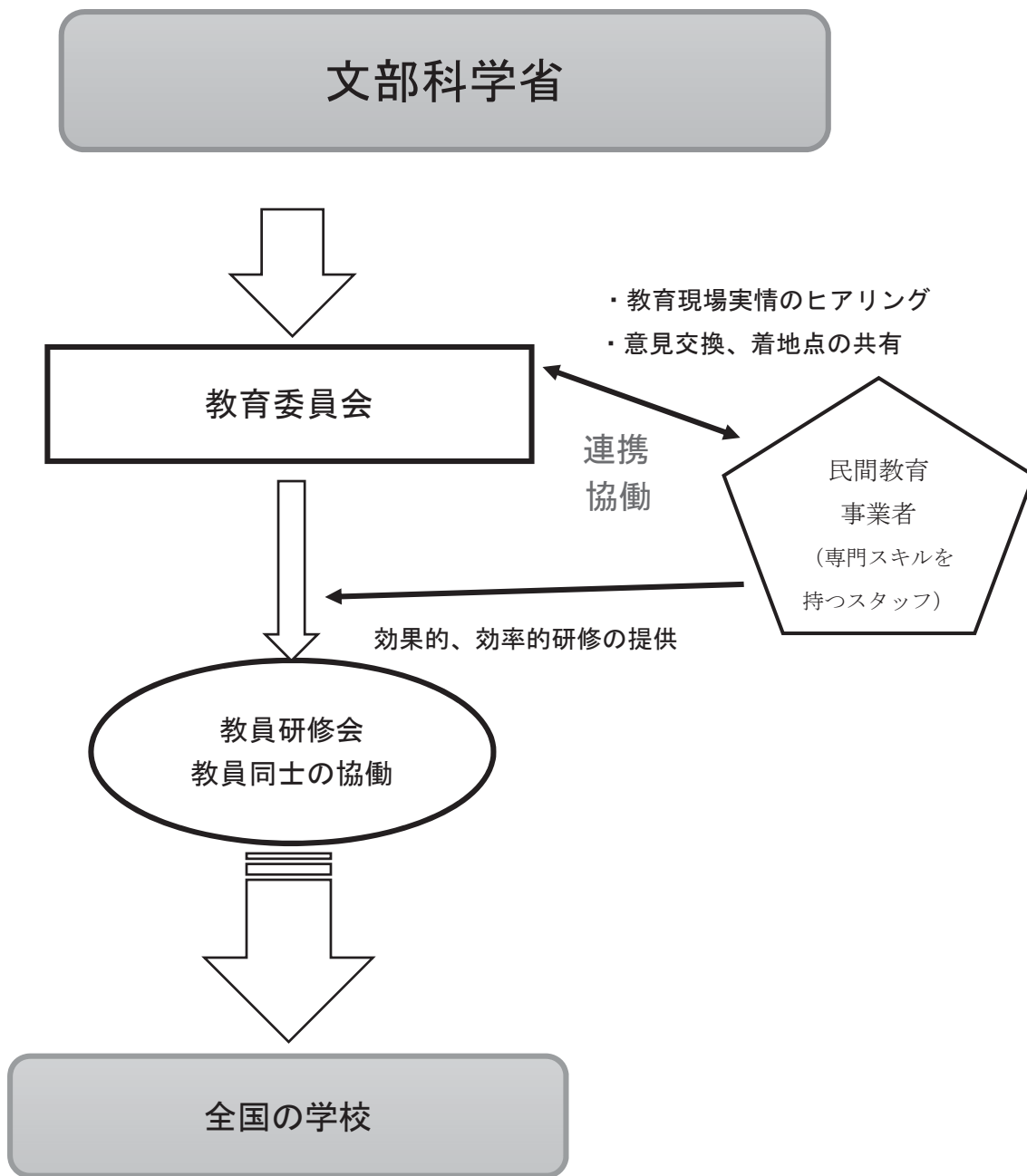


図 4.2 連携図

(2) 即興型英語ディベートに関する教育ジャッジ（審査員）認定制度の活用

3・1の高校教諭の言にもあったように、即興型英語ディベートのジャッジができる教員養成をすることが、日本の英語教育の推進につながる可能性があること、また有識者の「討論の勝敗を決めるにあたっては、『印象点』であってはならないため、明確な審査規準が必要である。この審査規準こそが教育現場の生徒たちの指導の観点となる。また、審査規準に基づいて適切な評価ができる専門家の養成も大事である。」との見解を踏まえ、PDAではジャッジ資格を認定する仕組みの活用を提案する。PDA認定教育ジャッジの内容は次ページのとおりである。

次期学習指導要領に準拠した授業導入にあたって、アクティブ・ラーニングの一形態である即興型英語ディベートのスキルを身につけることに積極的な教員もあれば、「そこまで学ぶやる気がおきない。今の学校では取り急ぎ必要がないことは、やる時間がない」というコメントを出す教員もあった。しかし、教員の継続的な学びが、生徒にとって大事であるから、そのような切実な悩みをもった教員のモチベーションを後押しするための方策を検討した。その一つが教育ジャッジ認定の活用である。本認定の活用の趣旨は、教員をいわゆる特別に上手い「ディベータ」（ディベートでスピーチ実践する人）に教員を養成するという意図ではなく、生徒に適切なディベート教育をできる人を認定していくことである。それにはもちろん教員自身がディベートのルールやマナーを学び、実践を経験することが必要である。しかし、それ以上に、教育的配慮のあるジャッジができる指導者を育成していくことが重要である。教育的配慮のあるジャッジとは、単に勝敗を論理的に導くだけではなく、生徒の次への成長につながる有意義なフィードバックをすることができる人材である。生徒のモチベーションも上がるような声かけも非常に重要である。このようなジャッジの認定制度があれば、それを目指すモチベーションも教員の継続的な自己研鑽につながる新しい仕組みとなると考えられる。

「どのようになれば即興型英語ディベートに関するジャッジ認定証取得に関心が高まりますか？」の問いには、「文部科学省から推進されたら」や「教員免許更新に必須となれば」、「即興型英語ディベートが授業で必須になれば」との回答もあった。「ディベートのジャッジをする」という役割に関して、難しさを感じる教員が多くあるため、文部科学省の指導要領に準拠したジャッジの仕方がわかる教員を育成することも重要である。（別紙 評価基準参照）

以上2つの提言を踏まえ、今後、ますます教育委員会、教育現場と連携して、そのニーズをききとり、速やかに民間事業者のチームが、教員の資質能力向上に貢献してゆく取り組み、ならびに教員研修の質の向上に取り組んでゆきたい。

【PDA 認定】教育ジャッジについて

一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会 (PDA)

パーラメンタリーディベートを社会に広く効果的に推進するため、PDA ではジャッジの認定制度を導入します。特に、中学・高等学校を中心とした授業におけるパーラメンタリーディベートの導入をサポートしていきます。

【PDA 認定】教育ジャッジとは、主に中学・高等学校の授業で使用されるパーラメンタリーディベート（即興型英語ディベート）のフォーマット（ここでは、ショートと呼びます）の下、教育的な指導ができる認定ジャッジのことです。PDA は、授業や公式大会においてジャッジが求められる際、認定を受けた教育ジャッジを推薦します。

【教育ジャッジ認定試験の受験資格】

1. 大学生以上。PDA 個人会員であること。
 2. ディベートおよびジャッジの実践経験
 - (1) ディベート実践（ショート）を 6 回以上。
 - (2) ジャッジ実践（ショート）を 6 回以上（内、3 回以上を PDA 公認の授業現場において実践）
- ※PDA およびそれに準ずる研修会での実践とします。

【認定試験】

- (1) 筆記試験
 - ルール
 - ジャッジとしての心構え等
- (2) ディベート実技（ショート）
 - 基本的な構成のスピーチができる。
 - タイムマネジメントができる。
 - POI を 1 回以上出せる。
 - POI を 1 回以上受け、適切な返答ができる。
 - アイコンタクトがある。（スピーチ時間の 50%以上）
 - 説明において大きな論理の飛躍が見られない。
- (3) ジャッジ実技（ショート）
 - 司会進行ができる。
 - 授業時間を考慮したタイムマネジメントができる。
 - 勝敗を出せる。
 - 論理的にある程度納得できる勝敗の理由を述べられる。
 - 建設的な個人コメントを述べられる。
 - 教育的配慮に欠けない。

おわりに

「総合的な教師力向上のための調査研究事業」として、「即興型英語ディベートを用いた教員の研修プログラムの開発・実施」を約一年間行いました。教育委員会ならびに教育庁、指導主事や高校教員の皆様と連携するなかで伝わってきたのは、教育現場の先生方がいかに「教師として、教育関係者として、生徒と共に成長したい」と願っておられるか、その強い思いです。教員研修会参加者の経験年数の多寡があるなか、教師間でも世代を超えて協働し学び合おうという積極的な空間が生まれている様子は圧巻でした。

今回の調査研究事業を通じて知らされたのは、役割分担の重要性です。教育課題のひとつであるアクティブ・ラーニングのための指導法を、身につけたいという教員の意志があっても、現場はあまりにも多くの課題に対応が迫られているため、自身が何を学び、生徒に伝えることがグローバル化を踏まえた英語教育の強化、生徒の成長につながるのかを見極める壁に直面しています。民間教育事業者の専門的知識（今回は、「即興型英語ディベート」）を提供することで、教育現場がより効果的、効率的にアクティブ・ラーニングの一形態である「即興型英語ディベート」という現今の教員に必要な資質能力を、一層向上させることを目指しました。専門的知見の提供という役割を充分担うには、専門家としてのスキルだけではなく、指導主事や、高校教員の皆さんから、直接話を聞いたり、高校の授業を参観したりなどして、現場を知ることが大事だと実感いたしました。様々な学校の特色を知り、その学校に応じた授業づくりのサポートができるよう尽力するのが今後の民間教育事業者の課題でもあります。

本事業を通じて、教育委員会、教員の皆様と連携し、教員の皆様が自ら学び続ける意志と能力を育む一助となれたことを願います。私ども民間教育事業者もおおいに使命感を高めさせていただいたことに感謝しつつ、本調査研究事業を踏まえ、今後もグローバル時代における教育事業へ貢献してゆくことを誓いたいと思います。

一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）

代表理事 中川 智皓

文部科学省事業担当 新谷 典子（本調査研究報告書執筆責任者）

付録

- 研修での補助教材抜粋(参考:授業のできる即興型英語ディベート、中川智皓著、2015)
- 即興型英語ディベートにおける評価項目および評価基準
- 記事掲載：教育PRO、第46巻、第20号、P.20、2016年9月6日
- 平成28年度文部科学省公募調査研究申請書（PDA）抜粋

ディベートのルール

(1) 概要

ある 1 つの論題が与えられ、肯定側チーム(Government)と否定側チーム(Opposition)に分かれ、一般聴衆であるジャッジを説得する。肯定側か否定側かは主催者によって決められ、ディベータ自身で選ぶことはできない。より説得力（議論の中身，説明の仕方など）があったチームが勝ちとなる。

(2) ディベータの人数

各チーム 3 名の計 6 名。それぞれの役割名と内容を図 1 に示す。

(3) 準備時間 (Preparation Time)

15 分

(4) スピーカの順番, 時間

スピーチの順番は図 1 の矢印の通りである。スピーチ時間は、3 分または 2 分である。ただし、前後 30 秒は許容範囲である。ジャッジはスピーチの終了時間の 30 秒前に 1 回ノック、スピーチ終了時間に 2 回ノック、終了時間 30 秒後にはノックをし続ける。(例えば、3 分のスピーチであれば、2:30 で 1 回ノック、3:00 で 2 回ノック、3:30 でノック継続)

スピーカとスピーカの間には、準備時間はない。スピーカはジャッジに呼ばれれば、速やかに演台に移動する。

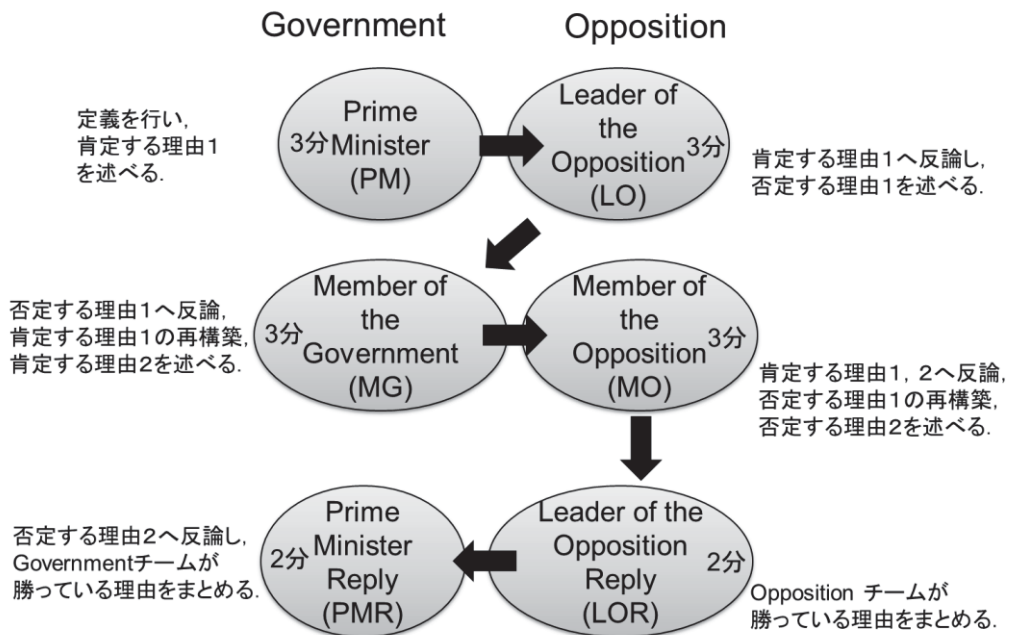


図 1 ディベート概略図

(5) スピーチ内容

最初の 4 つのスピーチを Constructive Speech (立論), 後の 2 つのスピーチを Reply Speech (まとめ) という。Constructive Speech ではどのような論点を述べてもよいが, 基本的に Reply Speech では, Constructive Speech で述べていない新しい論点は出せない。

(6) 質疑応答 (POI, Point of Information)

相手チームのスピーチ中に, 質問やコメントを 15 秒以内で発言することができる。それを Point of Information (POI) といい, “On the point, sir” や “POI” などと声をかけ, 質問する。質問を受けるか否かは, スピーカが決めることができ, 受ける場合は “Yes, please.”, 受けない場合は “No thank you.” などのように答える。

なお, POI はいつ行ってもよい。ただし, POI をして一旦断られた場合は, その 15 秒後以降から再度 POI をすることができる。POI の間もストップウォッチの時間は止めない。

(7) ディベート終了後

ディベートラウンドが終了すれば, 対戦相手と握手を交わす。

(8) ジャッジ

ジャッジは, 新聞を読んでいれば分かる一般的な知識を持つ人と想定する。個人的な考え, 専門知識, 偏見をできるだけ排除し, 客観的に判定する。基準は主に「内容」と「表現」の 2 つである。

<内容>

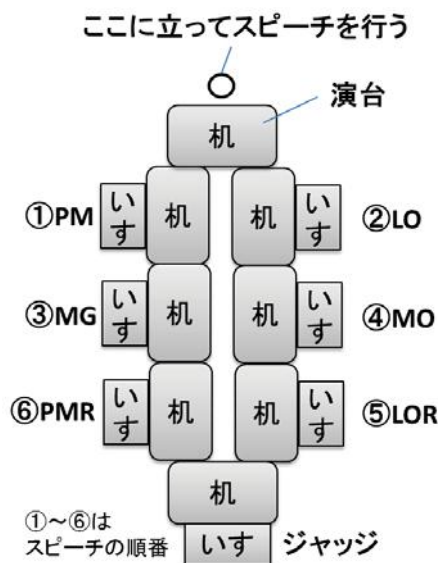
- ・ 主張に理由があったか
- ・ 反論があったか
- ・ 例やデータを用いて, 十分に説明をしているか
- ・ POI で積極的に議論しているか

<表現>

- ・ はっきりと分かりやすい言葉で話しているか (声の大きさ, スピード, アイコンタクト, 身振り手振りなど)
- ・ 構成は分かりやすいか (論点の順番, ナンバリング, サインポスト)
- ・ スピーカの役割を果たしているか

(9) その他

- ・ スピーチは前で立って行う。
- ・ スピーチ中は, チームメイトと話せない。
- ・ POI を行う時は立つ。断られれば座る。
- ・ スピーカの順番は, 論題発表前に決めておく。



スピーチシート

Prime Minister (PM) (肯定側 1 番目)

挨拶 Hello everyone.

お題 Today's topic is

論題を記入する

定義 We define the motion as follows.

定義を必要とする
事柄があれば定義
する

肯定ポイントの数の確認 We have two points.

肯定ポイント 1 の名前 The 1st point is

肯定ポイント 1 の
題名を記入する

肯定ポイント 2 の名前 The 2nd point is

肯定ポイント 2 の
題名を記入する

肯定ポイント 1 の説明 I will explain the 1st point

肯定ポイント 1 の
題名を記入する

We believe that

肯定ポイント 1 の
具体的な説明を記
入する

論題を記入する
(肯定)

結論 Therefore,

終わりの挨拶 Thank you.

Leader of the Opposition (LO) (否定側 1 番目)

挨拶 Hello everyone.

否定側の方針確認 We believe that

論題の否定文を記入する

肯定ポイント 1 への反論 Let me rebut what the Government team said.

They said

PM で述べられた肯定ポイント 1 を記入する

However,

肯定ポイント 1 への反論を記入する

Therefore,

肯定ポイント 1 が成立しないという結論を記入する

否定ポイントの数の確認 Next, let me explain our points. We have two points.

否定ポイント 1 の名前 The 1st point is

否定ポイント 1 の題名を記入する

否定ポイント 2 の名前 The 2nd point is

否定ポイント 2 の題名を記入する

否定ポイント 1 の説明 I will explain the 1st point

否定ポイント 1 の題名を記入する

We believe that

否定ポイント 1 の具体的な説明を記入する

結論 Therefore,

論題の否定を記入する

終わりの挨拶 Thank you.

評価項目

高等学校学習指導要領 英語表現 I、II の目標(抜粋)「論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす。」
 「論理の展開」=内容、「表現の方法」=表現の2つに分けて、評価する。

内容	文部科学省 学習指導要領との対応
主張に理由があったか。	英語表現 II 2(1)イ 論点や根拠などを明確にする
反論があったか。(PMIは除外)	英語表現 II 2(1)ウ 発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べ合う。英語表現 II 2(1)エ 相手の説得するために意見を述べ合う。
簡単な例やデータを用いる等で、十分に説明をしていたか。	英語表現 II 2(1)ウ 学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。
論点との関連性を考慮できていたか。	英語表現 II 1 目標 事実や意見など多様な観点から考察 英語表現 II 2(1)ア 「与えられた条件に合わせて」、即興で話す。

表現	文部科学省 学習指導要領との対応
はっきりと分かりやすい言葉で話しているか。(声の大きさ、スピード)	英語表現 I 2(2)ア 話す速度、声の大きさなどに注意しながら話すこと
Non-Verbal Expressionで聴衆を意識しているか(アイコンタクト、身振り手振り)	英語表現 II 2(2)ウ 「発表の仕方」や討論のルール、それらの活動に必要な表現などを学習し、実際に活用すること。
構成は分かりやすいか(論点の順番、ナンバリング、サインポスト、タイムマネジメント)	英語表現 II 2(1)ア 「伝えたい内容を整理して」論理的に話す。
スピーカの役割を果たしているか。	英語表現 I 2(1)ア 目的に応じて簡潔に話す

POI(質疑応答)を通じた議論参加への積極性を評価します。

POI	文部科学省 学習指導要領との対応
POIに立つこと(断られた場合も含む)に1点。	英語表現 I、II、英語会話 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成
POIに答えるごとに1点。	英語表現 II 2(1)ウ 発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べ合う。
POIでの質問が効果的であれば1点。	
POIでの返答が効果的であれば1点。	

※POIは参考点とし、チームの合計点数には入れません。

評価基準

内容	基準	例
0	一言も発しない。	
1	ほとんど何も言っていない。	・挨拶のみ、論題を読むだけ。
2	大部分の内容が分かりづらい。説明量がかなり少ない。	・内容が、主張の1～2文のみ。
3	内容に分かりづらい部分があり、評価項目の半分以上が全くできていない。	・理由がない。反論がない。論理が飛躍している。などの問題点が多く見られる。 ・実質的なスピーチ時間が30秒以下。
4	内容に分かりづらい部分があるが、評価項目の半分程度が最低限できている。	・内容の質はともかく、何らかの理由がある。または何らかの反論がある。など話すべき事項の半分程度がなされた。 ・しかし、それ以上の説明が乏しく、内容が真体的ではない。
5	内容はほとんど分かるが、評価項目のうちできていない点の一部ある。	・論理がある程度通っている。 ・しかし、立論はできたが、反論ができなかった。立論や反論はできたが、論題との関連性は薄かった。反論はあるが、関連性がなく、反論ではなく主張になってしまっている。繰り返しが多く、等の問題点がある。 ・実質的なスピーチ時間が、2分半に満たない。
6	内容はほとんど分かり、全ての評価項目について、最低限できている。	・論理がある程度通っており、最低限の立論ができている。反論も関連性が認められる。 ・実質的なスピーチ時間が、2分半を満たす。
7	内容が分かり易く、全ての評価項目について、大体できている。	・論理が通っており、立論、反論が具体的にできている。論題との関連性もある。 ・PMの場合、現状分析のある主張ができている。等
8	内容が分かり易く、評価項目の半分以上が効果的にできている。	・論理が通っており、効果的な立論と反論が目立つ。比較を入れて自分の主張を強めることができている。 ・PMの場合は、立論の際に、特にチームスタンス、丁寧な現状分析、比較を入れた説明ができている。等
9	内容が非常に分かり易く、評価項目のほとんどが効果的にできている。	・いずれの内容も具体的に、効果的である。説明すべてが非常に分かりやすい。 ・相手チームの視点を踏まえた分析で主張や反論を深めている。等
10	評価項目の全てが完璧にできており、内容に非の打ちどころがない。	・いずれの内容も完璧で、改善のコメントが特にならない。

表現	基準	例
0	前に出ない。	
1	ほとんど聞こえない。	・声がかなり小さい。始終顔が下を向いている。またはスピーチシートで顔が全く見えない。
2	とても聞きづらい。	・声が小さい時間が多く、聞きにくい。顔は下を向いていることが多い。
3	聞きづらい部分があり、評価項目の半分以上が全くできていない。	・声が時々聞こえない。 ・ナンバリング、サインポストがない。どこについて話しているか分からない。スピーカの役割ができていない。
4	聞きづらい部分があるが、評価項目の半分程度が最低限できている。	・声が時々聞こえないこともあるが、大体の構成はできている。 ・棒読みが目立つ。
5	大体聞き取ることができるが、評価項目のうちできていない点の一部ある。	・声は聞き取ることができる。 ・構成、サインポスト、アイコンタクト、スピーカーの役割ができていない点の一部ある。
6	大体聞き取れ、全ての評価項目について、最低限できている。	・声は聞き取れ、最低限の構成、アイコンタクトができている。スピーカの役割も最低限果たせている。
7	聞きやすく、全ての評価項目について、大体できている。	・スピーチが聞きやすく、アイコンタクトや身振り手振りも大体できている。構成やスピーカの役割も大体できている。 ・落ち着いてスピーチができている。
8	聞きやすく、評価項目の半分以上が効果的にできている。	・堂々とスピーチができ、説得力の増す身振り手ぶりが目立つ。構成やスピーカの役割も効果的にできている。
9	非常に聞きやすく、評価項目のほとんどが効果的にできている。	・いずれの表現も効果的で、非常に聞きやすい。 ・ただし、マイナーエラーがある。
10	評価項目の全てが完璧にできており、表現の仕方に非の打ちどころがない。	・いずれの表現も完璧で、改善のコメントが特にならない。

※マイナーエラー: タイムマネジメントの問題、単語の発音の間違いなど。

Topic

大阪府立大・中川助教の研究実践、 「即興型英語ディベート手法」が学校現場で注目

大阪府立大学（堺市）工学研究科の中川智皓（なかがわ・ちひろ）助教が紹介・実践活動を続けてきた「即興型英語ディベート手法」が、学校現場で注目を集めている。文部科学省が公募した「平成二十八年度総合的な教師力向上のための調査研究事業」に申請した事業案が採択



即興型英語ディベート（写真奥が中川助教）

され、今年五月から高校教員を中心とした研修に取り入れる活動がスタートした。

背景には、学校現場での英語教育が、「アクティブラーニング」を重んじる手法に変わってきていることがある。採択には、これまでの即興型英語ディベートの紹介を二五〇校の高校に実施したのが評価された。

「即興型英語ディベート」は、「パーラーメンタリーディベート」ともいい、一つの論題に対し、肯定と否定チームに分かれ、各々のチームが第三者を説得させるパブリックスピーチ型のディベートである。

論題は、社会、政治、倫理、環境、国際問題など多岐にわたり、論題が発表されてから一五〇分程度の短い準備時間の後、ディベートを開始する。ディベートをする者は、肯定または否定チームいずれに属するか

を自ら選ぶことはできず、自身の意見とは異なる観点からの主張も考えなければならぬ。研修会は、中川助教が指揮をとり、代表理事を務める一般社団法人パーラーメンタリーディベート人財育成協会（PDC）が運営を行う。

中川助教と大阪府立大学は、これまで即興型英語ディベートの研修でSSH（スーパーサイエンスハイスクール）やSGH（スーパーグローバルハイスクール）などの高校、教育委員会と連携。堺市・大阪府立大学産官学連携人材育成等事業（二〇一一年～二〇一三年、二〇一四年～二〇一五年）では一般社会人にも即興型英語ディベートの機会を提供。大阪府立大学異分野融合支援事業で「パーラーメンタリーディベートを用いた総合力の評価に関する研究」を実施中である。

実施が予定されている研修ス

ケジュールおよび研修対象は、今年七月から来年二月まで、大阪府教育委員会、千葉県教育委員会、沖縄県教育委員会とのそれぞれ各一回、合計三回の研修を予定している。

中川助教は現在、大阪府立大学工学域機械系専攻・工学研究科機械工学分野に勤務。学位は博士（工学）。専門は機械力学・制御（Keyword：パーソナルモビリティ・ビークル、運動力学、運動解析、マルチボディダイナミクス）

大阪府立大学大学院工学研究科機械系専攻博士前期課程を中途退学（二〇〇五年三月）した後、東京大学大学院工学系研究科産業機械工学専攻博士前期課程修了（二〇〇七年三月）、同大学院工学系研究科産業機械工学専攻博士後期課程修了（二〇一〇年三月）

学生時代に、大学生ディベート世界大会で日本記録を樹立し、東大総長賞を受賞。二〇一三年年度、高校生向けの事業が文科省採択され、全国の高校に「授業でできる即興型英語ディベート」の手法を紹介、新聞・テレビ等でも紹介された。

平成28年度文部科学省公募調査研究申請書 (PDA) 抜粋
(採択結果内容に基づき、一部計画が変更されています。)

平成28年 3月 18日

文部科学省初等中等教育局長 殿

総合的な教師力向上のための調査研究事業 事業計画書

実施テーマ	<input type="checkbox"/> 教員養成塾（「教師塾」等を活用した教員の育成） <input type="checkbox"/> 教員育成指標等の策定のためのモデル事業 <input type="checkbox"/> 新たな教育課題に対応するための科目を教職課程に位置づけるための調査研究 <input type="checkbox"/> 教職課程の質を継続的に保証できる仕組みの構築 <input type="checkbox"/> 教職生活全体を通じて学び続け、専修免許状等を取得するプログラムの開発 <input checked="" type="checkbox"/> 民間教育事業者の力を活用した教員の資質能力向上事業
-------	---

調査研究主題	即興型英語イベントを用いた教員の研修プログラムの開発・実施
--------	-------------------------------

調査研究実施機関	
機 関	（一般社団法人パーラメンタリーディベーター人財育成協会）
代 表 者	名 代表理事 （ふりがな） なかがわ ちひろ 氏 中川 智皓
事業実施責任者	所属部署・職名 代表理事 （ふりがな） なかがわ ちひろ 氏 中川 智皓 電 話 番 号 072-254-9220
事務連絡担当者	所属部署・職名 事務局長 （ふりがな） ひがしば かなこ 氏 東芝 佳奈子 住 所 堺市中区学園町1-1 大阪府立大学内 電 話 番 号 072-254-9220 F A X 番 号 072-254-9904 E-mailアドレス jimukyoku@pcpda.org

所 在 地： 大阪府堺市中区学園町1-1

申 請 機 関： 一般社団法人パーラメンタリーディベーター人財育成協会 (PDA)

代 表 者 職 名： 代表理事
氏 名： 中川 智皓

総合的な教師力向上のための調査研究事業の委託を希望しますので、別紙の事業計画書のとおり企画提案します。

1) 実施体制		
所属部署・職名	氏 名	役割分担
代表理事	中川 智皓	全体指揮
ディベーター推進委員	新谷 典子ほか数名	研修会のマネージ
事務局・事務局長	東芝 佳奈子	事務担当
アドバイザー	宮本 久也 (全国高等学校校長協会会長)	教育界からの助言
アドバイザー	志賀 俊之 (日産自動車副会長)	産業界からの助言

3-b) 連携内容（連携先がある場合は、記入すること。）
<p>京都市教育委員会（英語科）を通じ、即興型英語ディベートの紹介を行った。京都市内の高校と連携し、高校生の即興型英語ディベートの授業内の実践を行った。第13回高大連携教育フォーラムにおけるアクティブラーニングへの横断における、その成果を発表した。</p> <p>大阪府立大学において、高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究（文部科学省助成事業平成25年度～27年度）が行われた。昨今求められる筆記試験では測れないコミュニケーション力やプレゼンテーション力などを、即興型英語ディベート活動を通して向上させ、また評価する手法について検討した。</p>

4) 調査研究の目的
<p>本調査研究では、近年学校現場で求められるアクティブラーニングの一つである即興型英語ディベート（※）の指導が可能となる研修プログラムを開発・実施することを目的とする。</p>


※即興型英語ディベートとは、一つの論題に対し、肯定と否定に分かれ、聴衆（ジャッジ）を説得させるパブリックスピーチ型のディベートである。論題は、社会、政治、環境、技術、国際問題など多岐にわたる。論題が発表されてから15分程度の短い準備時間の後、ディベートを開始する。ディベートをする者は、肯定か否定チームのいずれに属するかを自ら選ぶことはできず、自身の意見とは異なる観点からの主張も考えなければならないことがある。（一方、古くから日本で行われているディベートは、教員から教員が、一年間同じ論題で証拠資料を収集し、試合でそれを読み上げて証明する「準備型」が主流であった。）世界では、教育現場にて即興型のディベートが広く導入されており、ブレイク音響など政治家をはじめ、多くの人々が即興型のディベートで培った力を活かし、グローバルに活躍されている。

- ・教員自身が即興で英語ディベートができる力を身に付ける研修プログラム
- ・教員が生徒に即興型英語ディベートを指導できる力をつける研修プログラム

上記2つのプログラムの特長は次の通りである。

- (1) **アクティブラーニング型研修**：本研修プログラムは教員自身がディベート実践を通して、論理的な議論構築、効果的なプレゼンテーション、短時間で簡潔な発言等の方法を学ぶ研修である。また、現場授業にて指導ができるよう授業進行の方法、補助教材の使用法などの学べる内容とする。ここで重要なことは、この種のアクティブラーニングの授業は、教員がやり方を紙面で学ぶよりも、教員自身が実践することで、その学習手法の特長、意義を身を持って体験でき、指導力が向上する点である。
- (2) **自ら学び続けるモチベーションの維持**：本研修では、ルールに従って、参加者全員が自らの意見を持ったチームでの議論をまとめ、必ず発言せねばならない環境が与えられる。自分の考え、知識または表現について反省すべき点（ジャッジ（講師）によって毎回明らかになる）にされるため、自己研鑽の必要性を痛感する。逆に、ジャッジから他の参加者が見習うべきと称えられる点も説明されるため、自信につながる要素も含む研修内容である。（教員は普段褒められる機会がない。）さらに、ディベ

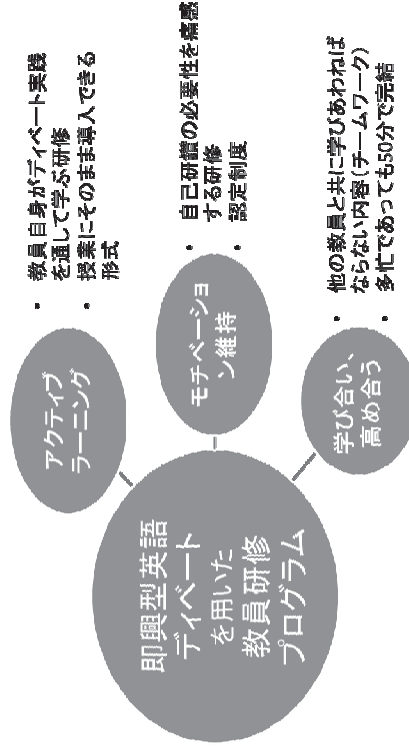
2) 課題認識
<p>急激なグローバル化や技術進歩のめまぐるしい昨今の社会発展に応じて、学校現場では新しい課題に対する指導力が求められる。そこで、教員の資質能力の向上は、最も重要な課題の一つである。本調査研究では、昨今求められる筆記試験では評価が困難な多様なスキル（英語で話す力、論理的思考力、幅広い知識、プレゼンテーション力、積極性など）を鍛える手法として即興型の英語ディベートを取り扱う。アクティブラーニングの一形態として即興型英語ディベートの授業での実践が少しずつ広がってきている。しかしながら、このような新しい学習方法に対して十分な指導ができる教員がかなり少ないのが現状の問題である。また、現場教員の日々の業務が多忙である背景を理由に、新たな課題に対する指導法を自己研鑽していくモチベーションが上がらないことも課題である。</p> <p>そこで、本調査研究では、教員に求められる新しい指導力の一つとして、教員自身の即興で英語ディベートができる力を身に付ける研修、および教員が生徒にその指導が可能となる研修プログラムを開発、実践することを目的とする。また、学び合い、高め合うモチベーションが上がり、継続する仕組みを提案する。</p>

3) 現状の取組
<p>一般社団法人パラーメタリディベート人財育成協会（PDA）では、即興型英語ディベート（パラーメタリディベート）を通じて、英語での発信力、論理的思考力、幅広い知識、プレゼンテーション力、コミュニケーション力など複数のスキルを育み、グローバル社会で貢献できる人財の育成に寄与することを目的に活動している。</p> <p>教育現場および社会における即興型英語ディベートの普及、高等学校をはじめとする学校での授業導入のための研究、指導者の育成を行っている。</p>
 <p>即興型英語ディベート実践の様子 (各テーブルに分かれて同時に対戦)</p>

3-A) 教育委員会・大学・独立行政法人教員研修センター等との連携	有	無	具体的な連携先
3-a) 連携の有無	有	無	
教育委員会	■	□	無
大学	■	□	無
独立行政法人	□	■	無
教員研修センター	□	■	無
その他	□	■	無

ート実践において講師側が評価を行うことも可能であり、評価に応じて即興型英語ディベート指導に関する認定制度を設けることで、モチベーションを向上、維持させる効果も期待できる。以上より、普段評価する側の教員が評価される（ジャッジ講師に毎回コメントをもらう）ことで達成感を伴う研修は、自ら学び続けるモチベーションに効果的に寄与すると言える。

(3) **学び合い、高め合うこと**：本研修プログラムは、他の教員とチームを組んでまた時には対戦して、共に学びあわねばならない内容である。また、通常授業の50分でも準備から実践、ジャッジまでを完結できるプログラム設計となっているため、多忙な教員でも比較的短時間で学び合える仕組みと言える。



5) 調査研究の具体的な内容・取組方法

本調査研究では、具体的に以下の内容・取組を行う。

(1) **研修プログラムの開発**

一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）では、社会人向け研修会及び教員研修会を行った経験があり、これまでの教員からの意見を反映させた研修プログラムを開発する。ビデオの効果的な活用などの工夫を行う。

(2) **研修プログラムの実施**

複数の教育委員会および全国高等学校校長協会と連携し、教員研修会を企画する。特に、教員は多忙であるため、単独地域で提案の研修プログラムを実施する場合、複数回の研修開催が負担となることが想定される。また、申請団体の代表理事は、これまで200校以上に即興型英語ディベートを紹介した経験があるが、地域によって新しい取り組みに対する意識や考え方、教員のモチベーション、レベルが大きく異なることを感じている。よって、本調査研究では、複数の教育委員会および全国高等学校校長協会に協力を得ることで、特定の地域のひとりよりよりになりならず、バランスよく効果的に調査を実施する。英語科を中心に研修参加希望教員を募る。

研修では、参加者を6～8人程度のテーブルにわけ、ディベート実践を行う。各テーブルにディベート経験のある講師（ジャッジ）を配置する。これにより、参加者一人一人への細かいフィードバ

ックが可能となり、学習効果およびその後のモチベーション向上に効果的につなげる。なお、参加者が想定よりも多くなかった場合は、遠隔通信システム（スカイプ等）を使用し、追加の講師については現地までの旅費をかけずに実施することを予定する。これにより、コストを抑えた内容となる。また、男女共同参画の観点より、研修会における託児併設の需要があることも分かっているため必要に応じて配慮する。

調査スケジュールの立て方として、前期の研修プログラムを実施したのち、調査結果を受けて、研修プログラムの改訂を行う。改訂された研修プログラムを用いて、後期の研修プログラムを行う。さらに、その結果を受け、必要に応じて追研修を行う。以上のPDCAサイクルを伴う適正な調査研究方法とする。また研修計画は1か月に1回とし十分実現可能な体制である。

(3) **成果の活用**

各地における研修では、教育委員会等の担当者、参加者へのヒアリングおよびアンケート調査を実施する。研修プログラムに対する改善点、感想など多方面からの意見を集め、より効果的な研修プログラムの提案につなげる。また、得られた調査結果について、申請団体のアドバイザーである志賀俊之氏（日産自動車副会長、産業革新機構代表取締役会長、中教審委員、宮本久也氏（全国高等学校校長協会会長、東京都立西高等学校校長）からの多角的な助言を得る。

得られた成果が広く活用可能なものとなるよう研修プログラムを紹介する資料、動画などをまとめる。また、教員のモチベーション維持や学び合う、高め合う意欲については、本調査研究内容の即興型英語ディベートに限らずにも応用できる可能性があるため、それらの点についても明らかにする。特に、全国高等学校校長協会との連携による研修会では都道府県をまたいで参加教員を集めるため、普段はあまり交流のない他県の教員との情報交換も可能となり、従来の県内研修に加えて新しい価値観やモチベーションが生まれるなどのメカニズムの活用も期待できる。

6) 調査研究における教育委員会・大学・独立行政法人教員研修センター等との連携

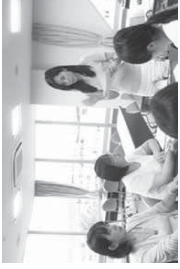
6-1) 連携の有無

教育委員会	連携先の種類		具体的な連携先	
	有	無	有	無
大阪府教育委員会	■	□	無	(大阪府教育委員会、京都市教育委員会、千葉県教育委員会、沖縄県教育委員会)
独立行政法人教員研修センター	□	■	有	(大阪府立大学)
その他の	■	□	有	(全国高等学校校長協会)

6-2) 連携内容（連携先がある場合は、記入すること。）

教育委員会および全国高等学校校長協会と連携し、各地での教員研修会の企画、調査を行う。大阪府立大学では、教員免許状更新講習を担当する教員が多数在籍し、また学際的に評価に関する検討が可能な環境が整っている。教員向けの研修方法に関する知見の共有等に多方面で連携を図る。

7) 調査研究の実施計画	
4月	研修プログラムの設定、整理
5月	調査資料作成、スケジュール調整
6月	ヒアリング、アンケート調査、研修プログラムの実施（大阪）
7月	ヒアリング、アンケート調査、研修プログラムの実施（沖縄）
8月	ヒアリング、アンケート調査、研修プログラムの実施（京都）
9月	全体会議、研修プログラムの見直し、改良
10月	ヒアリング、アンケート調査、研修プログラムの実施（千葉）
11月	ヒアリング、アンケート調査、研修プログラムの実施（東京）
12月	データ整理、研修方法のまとめ
1月	状況に応じて追研修
2月	全体会議
3月	報告書作成

8) 過去の調査研究実績
<p>代表理事（大阪府立大学、助教）による調査研究実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省、高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究（2013～2015年度、終了） ・堺市・大阪府立大学産学官連携人材育成等事業（2011～2015年度、終了） ・日本教育公務員弘済会 調査研究（2013年度、終了） <p>その他の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国高校教員即興型英語ディベート研修会（2015年3月、2016年3月予定） ・全国高校即興型英語ディベート合宿・大会（生徒および教員対象、2014年8月、2015年8月） ・第1回PDA高校生即興型英語ディベート全国大会（2015年12月） ・第1回PDA高校生バーラメンタリーディベート世界交流大会の実施（2016年1月） <p>後援：朝日新聞社、公益財団法人江副記念財団、大阪府立大学ほか</p>
 <p>教員向け研修の例</p>

9) 再委託に関する事項
再委託の相手方の住所及び氏名
再委託を行う業務の範囲
再委託の必要性
再委託の額
別紙様式2及び3のとおり。
10) 経費計画
別紙様式2のとおり。

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）が実施した平成 28 年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

平成 28 年度文部科学省初等中等教育局教職員課 公募
「総合的な教師力向上のための調査研究事業」採択プログラム

「即興型英語ディベートを用いた教員の研修プログラムの開発・実施」
平成 28 年度 成果報告書

発行 一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）

発行日 平成 29 年 1 月

郵便番号 599-8531 大阪府堺市中区学園町 1-1 大阪府立大学 工学研究科 中川研究室内
電話 072-254-9220
FAX 072-254-9904